

# 卵塔場の天女

泉鏡花

青空文庫



## 一

時雨に真青まつさおなのは蒼蠶魚かわはぎの鰭ひれである。形は小さいが、三十枚ばかりずつ幾山にも並べた、あの暗灰色の菱形ひしがたの魚うおを、三角形に積したづみんで、下積したづみになったのは、軒下の石に藍あいを流して、上の方は、浜の砂をざらざらとそのままだから、海の底のピラミッドを影のぞで覗く鮮あたらしさがある。この深秘らしい謎うおの魚うおを、事ともしない、魚屋は偉い。

「そら、持つてけ、持つてけ。賭博場ぼんごぎのまじないだ。みを食えば暖ほか暖ほかだ。」  
と雨垂あまだれに笠も被かぶらないで、一山ずつ十銭の附木札にして、喚わめいている。

やつぱり綺麗なのは小鯛こだいである。数は少ないが、これも一山ずつにして、どの店にも夥おびた多だしい。二十銭というのを、はじめは一尾びきの値だろうと思うと、十ウあるいは十五だから、なりは小形でもお話になる。同じ勢いきおいをつけても、鯛の方はどうやら蒼蠶魚より売手うりてが上品に見えるのも可笑おかしい。どの店のも声を揃えて、  
「活いきとるぞ、活いきとるぞウ。」

この魚市場に近い、本願寺別院―末寺と称とえる大道場へ、山から、里から、泊りがけに

参詣する爺婆が、また土産にも買つて帰るらしい。

「鯛だぞ、鯛だぞ、活きとるぞ、魚は塩とは限らんわい。醤油で、ほつかりと煮て喰わつせえ、頬ぺたが落ちる。——一ウーウ、ニアニアそら二十よ。」

何と生魚を、いきなり古新聞に引包んだのを、爺様は汚れた風呂敷に捲いて、莫塵の上へ、首に掛けて、てくりてくりと行く。

甘鯛、いとより鯛、魴の濡れて艶々したのに、青い魚が入交つて、鱧も飴色が黄に目立つ。

大釜に湯気を濛々と、狭い巷に漲らせて、逞しい漢が向颯巻で踏はだかり、青竹の割箸の逞しいやつを使って、押立ちながら、二尺に余る大蟹の真赤に茹る処をほかかと引上げ引上げ、晝一晝ほどの筵の台へ、見る間に堆く積む光景は、油地獄で、むかしキリシタンをゆでころばしたようには見えないで、黒奴が珊瑚畑に花を培う趣がある。——ここは雪国だ、あれへ、ちらちらと雪が掛つたら、真珠が降るように見えるだろう。

「七分じゃー八分じゃー一貫じゃー、そら、お篝じゃ、お祭じゃ、家も蔵も、持つてけ、背負つてけ。」

などと喚く。赫燿たる大蟹を篝火は分つたが、七分八分は値段ではない、肉の多少で、一貫はすなわち十分の意味だそうである。

菅笠脚絆で、箆に積んで、女の売るのは、小形のしおらしい蟹で、市の居つきが荷を張つたのではない。……浜から取立てを茹上げて持出すのだそうで、女護島の針刺といった形。

「こうばく蟹いらんかねえ、こうばく蟹買つとくなあ。」

こう言うのを、爪は白し紅白か。聞けば、その脚の細さ、みどころと云つてはいくらもない、腹に真紫の粒々の子が満ちて、甲を剥がすと、朱色の瑪瑙のごとき子がある。それが美味なのだという。（子をば食う蟹）か、と考えた。……女が売るだけにこれは不躰だった。香箱蟹だそうである。ことりと甲で蓋をしていかにも似ている。名の優しい香箱を売る姉さんだが、悪く値切ろうものなら泡のごとく毒を噴く。

びしゃびしゃ、莫塵を着て並んで、砂つきの小鰯のぴかりと光るのを売る姉えも同じで、

「おほほだ、そんな値なら私が食う。」  
と、横唧えにペロリと舐める。

「活きものだ。活きものだ。」

どこも魚市は気が強い。——私は見ていたが——妙なもので、ここで鯨を売ればいつでも、山車だしに載せて袂かみしもで曳ひきもしまいし、あの、おいらんと渾名あだなのある海豚いるかを売ればいつて、身を切つて客に抱かせもしないであろうが、飯蛸いいたこなぞもそうである……栄螺さざえ、黄螺ば、生の馬刀貝まてがいなどというと、張出した軒並を引込ひっこんで、異に薄暗い軒下の穴から、こう覗のぞく。客も覗く。……

つま屋と名づくるのが、また不思議に貝蛸かたがひの小店に並んでいて、防風芹ぼうふうふ、生海苔なまのり、松露、菊の花弁はなびら。……この雨に樺色かばいろの合羽占地茸かつばしめじ、一本占地茸、雨は次第に、大分寒い、山から小僧の千本占地茸、によきりと大松茸おおまつたけは面白い。

私が傘からかさを軒とすれすれに翳かざしてゐんだ処は——こう言出すと、この真剣な話に、背後うしろへ松茸を背負しよっているようで、巫山戯ふざけたらしく見えるから、念のために申して置くが、売もののそれ等は、市の中を——右へ左へ、肩擦れ、足の踏交ふみまじる、狭い中を縫あるって歩行いた間に見たので、ちょうど立ったのは、乾物屋の軒下で、四辻をちよつと入った処だった。辻には——ふかし芋も売るから、その湯気と、鳥賊いかを丸焼に醤油しんじゆの芬々ぶんぶんとした香を立てるのと、二三条の煙が濃淡あい纏もつれて雨に靡なびく中を抜けて来た。

「御免なさいよ。——連が買ものをしてるのを待つてゐるんですから。」

私と袖を合そでわせて立つた、橘八郎が、ついその番傘の下になる……蜷しじみの剥身むきみの茹ゆつたのを箆つくばに盛もつて踞おやじつてゐる親仁おやじに言いつた。——どうも狭いので、傘の雫しずくがほたたと剥身に落ちて、親仁が苦にがい顔をして睨にらみ上げたからである。

八郎はこの土地うまれで、十四五年久振りで、勤めのために帰郷する——私の方は京都へ行く用があつた。そこで自然誘われて、雪国の都を見物のため、東京から信越線を掛けて大廻りをしたのであつた。

当国へは昨夜ついた。

八郎の勤めというのも、その身の上も、私が説明をするより宿帳を見れば簡単に直ぐ分る。旅店で……どちらをはじめてだが、とにかく嚮導きやうどうだから……女中が宿帳を持参すると、八郎はその職業という処へ——「能職のうしよく。」と認しためた。渠かれは能役者である。

戸籍の届とどけい出は、音曲教師だというから、その通りなり、何とか記しようがありそうな処を、ぶつきらばうに、「能職。」——これに対して、私も一工夫したいようにも思つたが、年の割に頭も禿はげてゐるし、露出むきだしに——学校教授、槇村まきむらと名刺で済ました。

霜月、もみじの好季節に、年一回の催能、当流第一人のお役者が本舞台からの乗込みで

ある。ここにいささかなりとも、その出迎えの模様、対手方と挨拶の一順はあるべきだけれど、実は記すべき事がない。——仔細は別にあるとして、私の連立った橘八郎は、能楽家、音曲教師、役者などというよりも、実に「能職」の方が相応しい。

紋着、羽織、儀式一通りは旅店のトランクに心得たろうが、先生、細い藍弁慶の着ものに、紺の無地博多を腰さがり、まさか三尺ではないが、縞唐棧の羽織を着て、色の浅黒い空脛を端折つて——途中から降られたのだから仕方がない——好みではないが、薩摩下駄をびしゃびしゃと引摺つて、番傘の雫を、剥身屋の親仁にあやまった処は、まったく、「家。」や、「師。」ではない、「職。」であろう。

東京では細君と二人ぐらしで——（私は謡や能で知己なのではない。）どうやらごく小人数の活計には困らないから、旅行をするのに一着外套を心得ていない事はない。

あの、ぼつと霧雨に包まれた山を背後に、向つて、この辻へ入る時だ。……

「魚市へ入るのに、外套で、ぞろりは変だ。」

と往来で鉦をはずすと——（いま買ものをするのを待つと云つた）——この男の従姉だという、雪国の雪で育つた、色の抜けるほど白い、すっきりとした世話女房、町で老舗の紅屋の内儀……お悦という御新姐が、

「段々降つて来るのに——勝手になさい。」

留めるのかと思うと、脱がして、ざつと折つて、黒地の縞お召の袖に引掛けて取った。

「先生——」

ついでだから言うが、学校の教師だから、私を先生と——云う、私も時々、先生と云う。同じ事で……その紅屋のを、八郎が、「姉さん」と云うと、「兄さん。」と云う。「お悦さん。」と云うと「八さん。」と云う。従つて、年も同じだと聞く。

「先生は土地のお客人だ。着ていらつしやい。同じに脱ぐなんて串戯です、いや串戯じゃない。」

どうも、剥身屋の荷をかばうと、その唐棧の袖が雨垂に濡れる。私は外套で入交つて、傘をたたんだ。

## 二

時に、辻を向うに、泥脚と脛の、びしょびしょ雨の細流に杭の乱るがごとき中へ、  
 芻も上げない棲をきれいに、しつとりした友染を、東京下りの吾妻下駄の素足に捌いた

の<sup>まじ</sup>が、ちらちらと交<sup>まじ</sup>るを見ると、人を別けた傘を斜めに、撫<sup>なで</sup>肩<sup>がた</sup>で、櫛<sup>くし</sup>卷<sup>まき</sup>の凜<sup>りん</sup>とした細<sup>ほ</sup>面<sup>おもて</sup>の見たのは、紅屋の内儀で。年は八郎とおなじだが、五つ六つ若く見える処へ、女の一生に、四五度、うつくしい盛<sup>さかり</sup>があるという、あの透通るような顔に、左の眉から額にかけて、影のようだが疵<sup>きず</sup>のあとが幽<sup>かすか</sup>にある。

この婦人を、私は八さんに囁<sup>ささや</sup>いて、密<sup>ひそ</sup>に「三傘夫人<sup>みかさふじん</sup>。」と称えた。別儀ではない。——今朝<sup>けさ</sup>、旅籠屋<sup>はたごや</sup>で、朝酒を一銚<sup>ちようし</sup>子<sup>こ</sup>で、ちと勢<sup>いきおい</sup>のついた処へ、内儀<sup>すみやか</sup>が速<sup>すみ</sup>に訪<sup>ま</sup>ねて来て、土地<sup>とち</sup>子の立役者<sup>つくり</sup>はありながら、遠来の客をもてなしのそのお悦の案内で、町の最も高台<sup>たかだい</sup>という公園へ、錦葉<sup>もみじ</sup>を観<sup>み</sup>に出掛けた。北国の習<sup>ならい</sup>であろう、大池の橋を渡<sup>わた</sup>って、真紅<sup>まっか</sup>に色を染めた桜の葉の中に、細滝<sup>ほそたき</sup>を見て通る頃から、ぽつりと雨が掛<sup>か</sup>つた。すぐに晴れようと、口ハ台に腰を掛けた、が、その上に蔽<sup>おほ</sup>い掛つた紅楓<sup>もみじ</sup>の大木の美しさ。色は面<sup>おもて</sup>を染めて、影が袖<sup>そで</sup>に透<sup>とお</sup>る……霽<sup>は</sup>れるどころか、次第に冷い雨脚<sup>あまふし</sup>から、三人を包<sup>しづ</sup>んで、雫<sup>しず</sup>も落さな<sup>く</sup>い。そこで小学校の生徒たちの二列を造<sup>つく</sup>って、弁当<sup>べんとう</sup>を持<sup>も</sup>て扱<sup>あつか</sup>いながら坂を下りに帰<sup>かへ</sup>るのを視<sup>み</sup>たが、今日は、思掛けない雨だったものと見える。その他、遊びの人たちも、慌<sup>あわ</sup>しくは<sup>た</sup>ないが散<sup>あ</sup>り散<sup>り</sup>の中へ交<sup>まじ</sup>つて……御休所と油障子に大きく書いたのを、背中へ背負<sup>しょ</sup>つて、緋<sup>ひ</sup>めれん

すの蹴出しで島田鬚しまだまげの娘が、すたすたと、向うの吹上げの池を廻る処を、お悦が小走り  
 に衝と追つて、四阿屋あずまやがかりの茶屋の軒下に立つと、しばらくして蛇じゃの目を一本。「もう  
 け損そくつて不機嫌な処だから、少し手間が取れました。」この外交家だから、二本目は、公  
 園の坂の出口を行越ゆきこした町で、煙草を買つて借りたなどはものの数でもない。三本目に至  
 つて、私たちを驚かした。それは十町ばかりも邸やしき町まちを歩行あるいて出た大川端の、寂しい  
 しもた家だったが、「私、私は、私は（何とか）町の、竹谷の姪めいの娘が嫁に来たうちの、  
 縁者の甥おいに当るものの母親です。」談ずるのが、戸外おもてに待っている私たちに強く響いて、  
 ひそかに冷汗になつていた処——「むふん。」と笑いながら出て来て、ぼりぼりと油の乾  
 いた蛇目傘を開いた。トンと轆轤ろくろを切つて、外套がいとう兩名、相合傘でいた私に寄越よこして「ち  
 よつと骨が折れました、遠い引掛りなんですがね……」聾つんぽで中風症ちゅうふうしんのお婆さんが一人留守を  
 しているんだもの、驚きましたわ。「驚いた。」と八さんが言うから、私も「驚きまし  
 たなあ。」「だつてね、ようやつと談判が調つた処で、お婆さん、腰が立たないいでしよ  
 う。私が納屋へ入つて搔かまわして持つて来たんですのさ。」「肩がきがつくぜ、まるで昼  
 鷲とんびだ。」と八さんが言うのと、つんと横を向いたが、たちまち白い手で袖下すくを掬すくつて、  
 「ウシ、ウシ、ウシウシ。」もののたとえにさえ云う……枯柳かれやなぎの川端を、のそのそと

来た野良犬を、何と、佐川田喜六の蛙以上に可恐しがる、能職三十九歳の男に「ウシ、ウシ」と喉掛けると、「不可い姉さん。」と云う下から、田舎の犬は正直で、ウウと吠掛つたから、八さんは、ワツと云つて遁げ出すと、追掛けようとする野良を傘でばツさり留めて、橋袂の榎に打つかりそうな八さんを、「馬鹿だわねえ。……大きな態をして。……先生、おつきあい遊ばすのに、貴方、さぞお骨が折れましょう。」その凜とした眉が、雨に霞むように優しかった……

いまその三傘夫人の姿が見えると、すぐ後へ引添つて、袂をすれすれに大鮎が一匹、脊筋を飜して、腹にきらきらと黄金の波を打って泳ぐのが見えた。見事な鮎よ、ぴちぴちと躍つて、宙に雨脚を刎ねるようである。それは腰蓑で、笠を被つた、草鞋穿きの大年増が、策に上げたのを提げて、追継つた——実は、今しがた……そこに一群、鰻、鯰、鰻、穴子などの店のごちやごちやした中に、鮎を活かした盤台の前へ立停まつて、三傘夫人が、その大きいのを、と指さすと、ばちやんと刎上るのを、大年増が掌に掬つた時は、尾が二の腕に余つて、私は鯉だとばかり思った。

「こんなのは珍らしゆうござんすぞね、奥さん、乳の出る事は鯉のようなものではのうて

ね、これ第一や。今夜から、流れて走るぞね。」

「質屋が駆落をしましまいし。」

おおがた大潟で漁る名物だ、と八郎が私に云った。

いくら「幾干なの。」

「さあ、掛値かけねは言わんぞね。これで……さあ——」

この掛値がまた名物だ——と八郎は話しながら、鮎は重なつて泳いでいても、人ごみに傘の雨が灌ぐから、値の押合の間を、しばらく乾物屋の軒へ引込んだのであった。が、よくは分らないけれども、俳人凡兆の句の——呼返す鮎売見えぬ霰あられかな——の風情がある。

が、これは時雨で……買う人の姿も水際立つて、そうして、反対に——一旦、値がかけ違つて、内儀が足を抜いたあとを、鮎売の方が呼返して追つて来たらしい。

お悦は目ばやく私たちを見て、莞爾にっこりして、軽く手で招いた。

値が出来たのである。

「お邪魔をしました。」

八郎が剥身屋むきみやの親仁に軽く会釈をしたが、その語気いいかたは、故郷人ふるさとびとに対する親みぶりか、かえつて他人がましい行儀だてだか、分らないうちに、庇ひさしを離れて、辻で人ごみを出る内

儀と一所になった。手に提げた籠の笹の葉の中から金光が閃めいた。

「姉さん、黄螺を買って下さい、黄螺を。」と八郎が云った。

「何にするの？」

「まさか独楽にしやしない、食べるんだね。やあ久いもんだなあ。」

旅店を出がけに西洋剃刀を当てた頬を掌で中てた。

「東京にはこいつが少いかして、めったにお目に掛らないんです。いつか絵本を見るとね、灯を点した栄螺だの、兜を着た鯛だの、少し猥せつな蛸だのが居る中に、黄螺の女房といつてね、くるくると巻いた裾を貝から長々と曳いて、青い衣服で脱出した円鬚が乱れかかつて、その癖、色白で、ふつくりとした中年増が描いてあつたが、さも旨そうに見えたのさ。」

「可厭な兄さん。」

「いや、お客様に御馳走するのだよ。」

「御馳走ですな。」

「ちよつと……そのだらしない年増の別嬪を十ウばかりお出しなさい。」

売手は希有な顔をした。が、言戦い無用なりと商売に勉強で、すぐ古新聞に、ごごとご

とと包んで出した。……この中に、だらしない別嬪が居るのだそうである。

姿が好いからといって、糸より鯛。——東京の（若衆）に当る、土地では（小桜）……と云うらしいが浅葱桜で、萌黄に薄藍を流した鰯の若旦那。こう面白づくに嵩にかかると、娘の目に友染切で、見るものが欲しくなる。

私も自分で値をつけて、大蟹に湯気を擲めて提げた。

占地茸を一籠、吸口の柚まで調べて……この轆轤を窄めた状の市の中を出ると、たちまち仰向けに傘を投げたように四辻が拡がって、往来の人々は骨の数ほど八方へ雨とともに流れ出す。目貫の町の電車の停留場がある。

——ここは八郎と連立つて、昨夜一度来て見覚えがあつた、それは紅屋を訪ねたので。

——訪ねてきて帰りには、お悦がちようどこの辻まで送つて来て、勝手働きのままだったから、玄関も廊下も晴がましい旅籠まで送り返すのを猶予つて、ただ一夜——今日また直ぐ逢う——それさえ名残惜そうに、元氣な婦人に似ず、半纏の袖を、懐手で刎ねながら、姿は寂しく見送つたのであつたが。——察しられる。……ところで、その昨夜の事について、ここで言いたい事が少しある。

## 三

例の「能職」を宿帳に名のると直ぐだった。

「先生……」

私に対して、八郎はその親しい呼び方をして、

「もう晩の九時です。すぐに一風呂浴びて、お膳で一銚子という、旅では肝心な処ですね、少々御無理を願いたい事があるんです。——もうお互に年を取っているんですから、いささかたりとも御心配はありませんが、ここに私を待っていてくれる婦があるんです。

——時々——貴方あなただからお話をした事がありますね、従姉いとこなんですがね。……」

隔てない中だから、かねて、美人のその婦おんなのために、魂に火を点じて、幽かすかに生命を消さなかったと云うのを聞いた。真まことの性質は霜夜の幽霊のように沈んで寂しいのかも知れないのに、行ふるまい為は極めて蓮葉はすはで、真夏のごときは「お暑い。」と云うと我が家に限らぬ、他家よそでもぐるぐる帯を解く。「暑い、暑い。」と腰紐こしひもを取る。「暑いんだもの。」とすらりと脱ぐ。その皓しろさは、雪よりもひき緊しまつて、玉のようであった。お侠きやんで、凜りんとしているから、いささかも猥みだりがましい処がない。但しその白身で、八郎の古家ふるいえで、薄暗い二

階から、銀杏返いちようがえしで、肩で、脊筋で、半身で、白昼の町の人通りを覗のぞきながら、心ところて太や寒天を呼んだのはまだしも、その素裸で、屋根の物干へ立つて、遙はるかに公園で打揚げる昼花火を視みながら、八が心ばかりの七夕の竹に、短冊を結んだのには驚いた。その頃年と紀しわずかに十七八で、しかも既に二人の子の母であつたのだという。

私は、早くその人を見たいと思つた。誰も、この霜月の寒さに裸体になるものはない——見たいというのにいささかも遠慮はあるまい。

「御存じの不性ぶしょうものだから、時々ふしのたよりをするでもなし、先方も同然です。今度こちらへ来たのだつて、前もつて知らせてはいないんですから、構はいはしないようなものの、血は遠くつてもたつた一人の身寄だし……家は多人数で、他ほかのものはどう思おうとも、従姉だけは、故郷へ帰れば、きつとその家で草鞋わらじを脱ぐものと信じていてくれるんです。

そこで、御飯前にちよつと顔を見せて来たいんです、が、このまま寛くつろいで少しの間待まつていて下されば結構だし、御一所に願えればなお結構、第一汽車で国境くにぎかいの峠を抜けた時、これからが故郷ですと云うと、先生は何と言いました。あの大渦と海とが空に浮いて、目一杯に田畑ひらの展はてけた果に、人家十万余のあるのを視みて、（これは驚いた……かねて山また山の中と聞いたから、崖がけにごつごつと石を載のせた屋根が累かさなっているのかと思つたら、

割合に広い。……)とどうです。割合に広いは情ない。私は国自慢をした覚えはなし、自慢どころか一体嫌いなんだけれど、石屋根の家が崖にごつごつは酷いや。そいつを話して従姉から先生を怨ませたい。」

——思出しても可笑い。

「望む処ですよ。」

そこで、黒い外套で、黒い中折帽で二人揃って、夜の町へ出たとなると、忍びで乗込んだようで、私には目新しい事も多いのであるが、旅さきの見聞を記すのがこの篇の目当ではない。

件の傘に開けた辻で——昨夕、その時電車を下りて、賑かな、町筋を歩行く。規模は小さくても、電燈も店飾も、さすがに地方での都会であつたが、ちよつと曲角が真暗で、灯一つ置かない夜店に、大な炭団のような梨の実と、火が少しおこり掛けたという柿を積んだ、脊の低い影のごとき媼さんが、ちようど通りかかった時、生欠伸を一つして、「おお寒、寒、寒やの。……ありがとうござります。なまいだなまいだ。」と呟くのを聞いた。が、少なからず北国の十夜の霜と、親鸞の故跡の近さを思わせた。

「あれが、本願寺……」

と雲の低い、大な棟おおきを指さしながら、

「御苦労様——この小路をちよつと曲るです。」

と言ふかと思うと八郎が、

「おや……」

と立留まつた、

「ここに、あの菓子屋、こつちが下駄屋と、あれが瀬戸物屋、莫座屋もざや、合羽屋かつばやと、間違い

ツこはないんだがな、はてな、違つたかな。」

と少しばかり狼狽うろたえる。……

「違いはしません、——紅屋はあすこですよ。」

と私が笑つた。

「ですがね。」

「大丈夫……間違いはありません。紅屋です。」

「先生は、紅屋の鑑定家なのかなあ。まるで違つてゐる。これは細露地を一つ取違とちがえた……」

……

「ははは、大丈夫。いらつしやい。——あすこに紅屋の息子さんが坐すわっているから確たしかなもの

のです。」

読者も思掛けなかつただろうと思う……はじめての私が、八郎の故郷のしかも親類の家を認めたのは——およそ紅屋というものを、かつて京大阪の家造で心得ていたためではない。その息子というのが、一度上京して、八郎の家に居た処へ、私がちよつと行合わせて顔を知っていたからである。

八郎は肩を揺った。

「ああ、串戯じゃない——店ざらしの福助の置物という処が、硝子箱の菊慈童と早がわりをしているんだ。……これは驚いた。半蔀の樞戸が総硝子になって、土間に黄菊と白菊か。……大輪なのが獅子咲、くるい咲と、牡丹のように鉢植で。成程、あの菊の中から、本家、紅屋の軒看板が見えています、串戯じゃない。

第一、この角の黒渋赤渋の合羽屋が、雑貨店にかわつて、京焼の糶売とは、何事です。さあ二貫、二貫、一貫五百は何事です。」

とそこに人立の前では、極りの悪いほどの高声で、

「さあ、おいでなさい、何にしろ驚いた。」

「……唯今、お迎いに出来ます処で。……どうもね、小路の入口に、妙なお上りさんがお二

人たかたと思ひましたよ。」

と前垂がけのその息子が莞爾にこにこ々々する。店の人たちも三人一いつとき齊に礼をしたが、十鉢ばかり、その見事な菊を並べた、ほとんど菊の中に彳たたずんで、ほたりと笑いながら同じく一礼した、十徳じつとくを着そうな、隠居頭の柔和な老人が見えた。これが主人である。内儀は家つきの一人娘で、その十四の時、年の三十ばかり違うのに添った、婿養子で、當時は店の御支配人だったそうである。

「變つた、變つた。」

と、八郎は見廻して、

「可おそろ恐しくハイカラになつたなあ、ここはどこなんだろう。」

「小父おじさん、正に御親類の紅屋です、ははは。」

「いいえさ、この菊のある処だよ、土間が広くなつてさっぱり分らないね、見当が。」

「菊のありますね、その下は台所の井戸ですよ。吃驚びっくりして、ははは。大丈夫、危険はありません。父が手造りでしてね、屋根で育てたんですが、少々得意でしてね、その枝の撓しなった、糸咲の大輪なんぞは、大分御自慢でしてね、人様に見せたいんだが、置どころが外ほかにありませんから。」

老人はまたほたりと微笑ほほえんだ。息子に、今年の春、嫁が出来て、すつぱりと店を譲ったので、隠居仕事の気楽さに、永年の望みだったのを、今年はじめて苗から育てた、と言うのである。

「お楽たのしみですな。」

「何の……あんだ。」

「姉さんは？」

八郎は息子を見返った。

「……ええ、台所に——お、ちよつと。」

「いらつしやいまし。」

すつと、そこへ、友染模様が浮出たと見ると、店口の敷居へ、結綿ゆいわた島田が突伏つつぶした。

「やあ、これは、これはどうも、……何分ただいどうぞ、唯ただ今、はじめまして、おめでとう。  
お正月のようだ。」

と八郎は一人で照れて、

「いあらたづれ更めて御挨拶を——何は、……姉さんは、お母つかさんは、……お悦さんは？」

と、やや忙せきこ込んだように云った。私は、はじめからその心を察し得た。留守ではないか、

私もちよつときみしかつた。そうして、店の隅なる釣棚の高い処に、出額で下睨みをし  
ながら、きよとりと円い目をして、くすりと笑う……大な、古い、張子の福助を見た。色  
は元<sup>は</sup>げたが、活<sup>い</sup>きているようで、——（先には店頭<sup>みせさき</sup>にあつたのだと後で聞いた）——息  
子は好男子なのに、……八郎の言つた福助の意味も分つたが、どこに居ても、真夜中には、  
ふツと抜けて、屋の棟へちよんと乗つて、ここの一家を守りでもしそうで、且つ何となく、  
不気味だつた。

その時である。

「こつち、こつち、ほほほ。」

と派手な声が、嫁さんの花簪<sup>はなかんざし</sup>の上を飛んで来た。

すぐに分つた、店口に入る、茶の室<sup>ま</sup>と正面の階子壇<sup>はしごだん</sup>の下に、炭火の赫<sup>かッ</sup>と起つた台十  
能<sup>う</sup>を片手に、立っていたのがすなわち内儀で、……と見ると艶々<sup>つやつや</sup>したその櫛<sup>くし</sup>巻、古

天井の薄暗さにも一点の煤<sup>すす</sup>を留<sup>とど</sup>めぬ色白さ。惜<sup>おし</sup>い事に裸身<sup>はだか</sup>ではないが、不断着で着膨れて  
いながら、頸<sup>えり</sup>脚<sup>あし</sup>が長くすらりとしていた。

「勝手が違つたね、……それでもここが可<sup>な</sup>懐<sup>つか</sup>いや。」

と、八郎がすぐに長火鉢の前へ膝を支くと、

「そこは混雑するからさ——唯今御挨拶を——」

と私には言いながら、八の脱いだ外套と帽子を、置戸棚の傍へ押束ねぎまに、片手業に火鉢にかかった湯気を噴く鉄瓶を提げて、すいと二階へ上って行く。

間早な事は、二階にもう鉄の火鉢に、郡内の座蒲団が二枚直してあつた。

「ははあ、お火鉢の方は、先祖代々だけれど、——この蒲団は新規だな。床に和合神の掛ものと。」

「その菊は——お手製の、ただ匂と……」

と、眈の切れた目をちよつと細うして莞爾しながら、敷居際で町家風の行儀正しく、私が面喰つたほど、慇懃な挨拶。

「おお、障子が新しくなつて、襖が替つた、畳も入かわつて——いや、天井の隙間まで紙が貼れました。あすこから、風が吹込んで、障子の破れから霰が飛込む、畳のけばが、枯尾花のように吹かれるのがお定りだったがな、まるで他家へ行ったようだ。」

「それでもやつぱり、私の内さ、兄さん……」

と颯と寂しい影がさしたが、

「兄さんが大好きで、そつちの物置の窓から、よく足をぶら下げて屋根を覗いた、石菖

鉢うばちの緋目高ひめだかね……」

と、唇まぶたか、瞼まぶたか。——手絡てがらにも襟みじんにも微塵みじんもその色のない、ちらりと緋目高ひめだかのような紅くれなゐが、夜の霜ささんかに山茶花ひとひらこぼが一片溢あふれたようにその姿かすを掠かすめた。

「親代々、まだ続いて達者でいます。余りかわったかわったと云うんなら、あれを一つ御馳走してあげましょうか。娘の時、私の額の疵きずを、緋目高だと云ったお礼を兼ねてね。」

「串じょうだん 戯あそびじゃあない……」

そこで旅籠屋に膳立の出来ている事を言つて今夜の馳走を断つた。

「ではそうなさい。近々に兄さんの来なさるツて事が此地ここのちの新聞に二三度続けて出ていましたからね、……五日ほど前に潟かたの鮒ふなを取つておいたの。お汗つけの熱いのをと思つてさ。いれものが小さかったか、今朝はもう腹を見せたから、実は晩みなに皆で頂いてしまったの。……私は二人前、誰かの分とも。——嫁が笑いましたよ。」

と軽く、乳のあたりをたたきながら、

「……明後日あさつてが舞台ですつてね。……じゃあ打合せやなにかで、宿で大勢待つてるんでしようね。」

「大丈夫……」

と、なぜか八郎はぶつきら棒に、

「そんな事更になしだ。……宿の方は他人交ぜず……姉さん一所においてなさい。この槇村先生と二人きりです。勿論、幹事の方から宿も指して寄越したし、……これでも、こんな土地……違つた……」

と胡坐を整然と直して、ここで十万軒が崖にごつごつをぶち開けたが、「そうでござんすとも、東京からいらしたんでは。」ために勢が挫けたそうで、また胡坐で、

「これでも人寄せの看板になるんですから、出迎やなんか、その支度もあつたんだろうが、……そのくらいなら、先生を誘つちやあ来ないんですよ。宿だつて知らせやしません。

——生意氣を言うようだけれど、何のかのつて、煩いから。……明後日——時間前にさえ樂屋へ行けば可いんです。——若干金か、旅費を出して、東京から私を呼ぶつたつて……

この土地の人は、土地流の、土地能の、土地節の、土地謡の方が大した自慢でね、時々九段や、猿樂町……震災で焼けたけれど、本舞台へ来て見物したつて、ふん、雁鴨の不忍池に、何が帆を掛けてじやい、こつちは鯨の泳ぐ大潟の万石船じやい——何のツて言う口です。今度だつて、珍らしい処を見世ものの気で呼んだんだからね。……ただ遊びじゃあ旅銭旅籠銭の余裕はなし、久ぶりで姉さんの顔は見たし、いい幸に來たんだから、どうせ

見世ものなら一人でも多く珍らしがらせに、真新しい処で、鏡の間から顔を出して、緋目高で泳いでれば可いんです。」

八郎は熱い茶を立続けに煽あおつて言った。不思議に面おもてに颯さつ爽そうたる血が動いた。

「でもね、楨村さん、大諸だいたいみよう侯の持もの御秘蔵というのが出るんですから、衣裳いしやうには

立派なのがあります。——第一天人の面は、私どもの方でも有名なのだし、玉かんざの簪が、鬘かつら、

女飾おんなばさ髻さうら、鬘おん帶なづ、摺箔すりはく縫箔ぬいはく、後で着けます 長ちやう絹けんなんでも、私が小児こどものうち、一度博

物館で陳列した事がありますがね、今でも目に着いています。全く三保の浦から松の枝ぐ  
るみ霞たなびに爰たなび翹たなびいて来たようでしたよ。……すぐわきの築山の池に、鶴が居たつけ、なあ……

……姉さん。……運動場で売っていた、ふかしたての饅頭たまが、うまそうで堪たまらなかったが、

買えなかった。天人の前に、餓鬼が居りや世話はない。」

と云つて苦笑しつつ、ほろりとした。

橘八郎は、故郷の初の舞台において、羽衣の一曲を勤めんとするのである。

話頭が転じた。――

何の機掛きかけもなかったのに、お悦が、ふと……

「……おひささん……」

とこう言い出したのが、私の耳を打った。

「……お久さんから便りがあったのでしょうか、兄さん。」

私たちが、もう立たち構がまえをした時で。

火鉢に中腰を浮かした膝が揺れて、八郎の顔がちよつと暗く見えた。沈んだ声で、

「……ありました、ありましたかね。」

「いいえね、……この春ごろでしたよ、ふいと店へ見えてね、兄さんの所番地はツて聞いたんです。何でも十何年ぶりとかで、この土地へ帰って来ましたってね……永い間、北海道も、何とかツて、ずツと奥の炭坑の方に居たんですってさ。」

「僕は返事を出しません。」

と、やや白けて言う。

「そうですか。」

「で、どんな様子をして……いや、聞くまい、薄情らしくって、姉さんに恥かしい。」

「私は何とも思いません。」

「畑はたした下ツてどんな処です。村かしら。」

「いいえ、町ですよ、ずツとはずれの方ですけれど、……じゃあ逢あいませんか。」

「さあ、どうしようかと思つて——榎村さん、聞かない振で居て下さいよ。」

「ちよつと、失礼しようかね。」

私は言つた。

「飛んでもない、いずれ先生には更<sup>あらた</sup>めてお話ししますがね——そこでだ、姉さん。」

「兄さん、構わないじゃありませんか、どつちだつて、逢つたつて……逢わなくツたつて……」

「さあ、そのどつちだつてで実は弱つた。」

額をうつむけに手をあてた。

「今度来るにも、ずつと途中から氣になつてゐるんですよ。——新聞なんか見ようつて柄じやあないから、今度の事も知りやしますまい。湯屋、髪結<sup>かみゆいどこ</sup>所のうわさにだつて、桜が咲いた歌舞伎の方と違つて、能じやあ松風の音ぐらいなものですからね。それとも聞き知つて、いまここへ訪ねて来たつて、居ないと言へば、それまでだし、……職業が職業だから、そこへ掛けては他人数で隔てが出来ます。楽屋口で断<sup>ことわ</sup>るのも仔細<sup>しさい</sup>ないけれど、そうかつて、実はね、逢いたくないことはないんですよ。」

「じゃお逢いなさいな、どうしてさ。」

「ところが眷属<sup>けんぞく</sup>大人数です。第一亭主がきましょう。亭主から、亭主の兄弟、その甥<sup>おい</sup>だ、その姪<sup>めい</sup>だ、またその兄だ、娘だ、兄の児<sup>こ</sup>だ、弟の嫁だッて、うじやうじやしている……こつちが何ものだか職業も氏素性も分らなけりや、先方<sup>さきさま</sup>様も同然<sup>どうぜん</sup>なんだから、何しろ、人の女房で見りや、その亭主に御承知を願わなけりやならない……」

「それは、兄さん、仔細<sup>わけ</sup>はないじやありませんか。」

「さあ、ところがね、義理にも、お目に掛<sup>か</sup>ろうなぞと来た日には——」

細君が何か言うと、

「可<sup>い</sup>厭<sup>や</sup>、可<sup>い</sup>厭<sup>や</sup>、可<sup>い</sup>厭<sup>や</sup>なんだよ、そんな奴に、」

とだだを捏<sup>こ</sup>ねるような語調と態度で、

「博<sup>ばく</sup>徒<sup>ちゆう</sup>でも破戸<sup>ぼこ</sup>漢<sup>つぎ</sup>でも、喧嘩<sup>けんか</sup>に対<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>は扱<sup>え</sup>ばないけれど、親類<sup>せんとく</sup>附<sup>つ</sup>合<sup>あ</sup>は大嫌<sup>きら</sup>いだ。」

「ああだもの。」

「いささか過激<sup>か</sup>になつたがね。……手紙の様子じやあ、総領<sup>そうりやう</sup>の娘<sup>むすめ</sup>というのが、此地<sup>ここ</sup>で縁着<sup>えんちゃく</sup>

いたそうだから、その新婦<sup>しんぷ</sup>か、またその新郎<sup>しんがう</sup>なんのツてのが、悪く新聞でも読んでいて――

――（お風説<sup>ふうわ</sup>はかねて）なぞと出て来られた日にや大変だ。」

「じゃあ、兄さんの、好きになさい。」

が、すこしも投出した様子はない。

「お久さんだけ、一人だけよ、一人だけなら逢つても可いんでしよう、どう？」

「さあ、そう、うまく行くか知らん。……内証で呼出したりなんかして、どんな三百代言が引搦ひっからまろうも知れないからね、此地こつちは人氣が悪いんだから。」

「分りました。」

ふきこぼれる鉄瓶をトンと下ろして、

「私に任せておきなさい。」

翌朝——今朝は細君が、八時に旅店へ訪ねて来た。畳んだ風呂敷を持ったまま、

「兄さん、お久さんは家うちへ来ます。時間は極めておかないけれど。……」

「早業はやぐさだなあ、町はずれだというのに、もう行つて来たんですか、迅はやいこと、まるで女天て狗いぬだ。」

と口では言いつつ、八郎は自おのずからその深切しんせつに頭つむりを下げた。

「一人だけ……」

その黙うなずつて頷うなずくのを視みて、

「で、亭主は居なかったかね。」

「居ましたとも、居たつて構やあしない。……逢いたくないものは逢いたくないんだから。」

「遣附やっつけましたな、いや外交家だ。辣腕らっわん辣腕。」

と瘦やせた肩を突張つつばりながら、

「他ほかには、誰も……」

「その縁着いた娘さんが帰っていますよ。トラホームで弱ってるんですつて。」

八郎はまた颯さつと眉を曇らせた。もつとも外へ出ると、もう、小川添の錦葉もみじで晴れたが。

やがて公園の時雨となつたのであつた――

ところで……紅あかき、青き、また黄なる魚貝ぎよばいを手に手に、海豚いるかが三頭さんびき、渋柿をぶら提さげたような恰好かつこうで、傘の辻から紅屋の店へ入つたが、私は法然頭の老主人をはじめ、店に居る人たちの外に、別に、「いや、昨夜は――」とその店仕きりの暖簾のれんを潜くぐる時、隅の棚の、あの福助に思わず声を掛けようとしたのには、あとで自分でも妙な気がした。なぜというに、目をきよろりと出額おでこの下から、扇子構がまえで、会釈をしたように思ったからである。

「やあ、雪代さんか、」

と、八郎が声を掛けた優婉な婦人が居て、菊の奥を台所口から入ったお悦の手から魚籠を受取った。……品のいい、おとなしづくりの束髪で、ほっそりした胸に紅い背負上がちらりと見えて、そのほかは羽織も小袖も、ただ夜の梅に雪がすらすらと掛つたような姿であつた。——あとでも思つたが、その繕わない無雑作な起居の嫋々さもそうだが、歩行く時の腰の柔かに、こうまでなよなよと且つすなりするのを、上手の踊のほかは余り見掛けない。引しまった、温かい、すつと長い白い脚が、そのまま霞を渡りつつ揺れるかに見える。同じくらいの若さの時、お悦の方は颯と脱いで雪が露われたのだし、これは衣を透過するのであろう。「雪代さん」聞いただけで、昨夜から八郎も言わなければ、あえて私も聞こうとはしなかった。その「お久さん。」とかいうのでない事は直ぐに知れた。雪代はお悦の娘で——主人は折から旅行中の、ある陸軍中佐の夫人だという。

「小父さん、いらつしやい。」

八郎はずかずかと、

「よく、来たね。」

「ええ、私今日は、接待員よ、御珍客様の。」

「うむ、沢山<sup>たん</sup>あの先生にお酌をしてあげておくれ。——これで安心したよ。……やくぎな小父さんなんぞと違つて、先生だからね。学校出の令夫人<sup>おくさん</sup>だ、第一義理がある。何しろ、故郷は美人系だツてんで、無理に誘つて来たんだけれど、まだ一向別嬪<sup>べっぴん</sup>にお目にかからないので、申訳のなかつた処なんだよ。お前さんの顔を見て、ほんとうに安心した。——いかがです、楨村先生。」

「串<sup>じょうだん</sup> 戯<sup>ご</sup>じゃあない、串戯<sup>じょうだん</sup>ですよ。いやまつたくです。」

そこで私は雪代さんの礼を受けた。

八郎は、すぐ前の台所へ出て、流<sup>ながし</sup>に立つたお悦の背後<sup>うしろ</sup>から、肩越しに覗<sup>のぞ</sup>込んでいたが、「来て御覧なさい楨村さん——この鮒<sup>なまこ</sup>は見ものですから。」

私はまだ馳走に呼ばれて台所を紹介された事がない。が、そんな心安だてより、鮒<sup>なまこ</sup>の見事だったのより、ちよつと話したいのは三傘夫人<sup>さんさんふじん</sup>の効<sup>かい</sup>々<sup>がい</sup>しさで。……俎<sup>まな</sup>の上に目<sup>め</sup>の下およそ一尺の鮮<sup>せん</sup>鱗<sup>りん</sup>、ばちばち翻<sup>た</sup>るのに、襷<sup>たすき</sup>も掛けない。……羽織を着たまま左の袖口<sup>そでぐち</sup>に巻込んで、矢蔵の艸<sup>そう</sup>という形で、右に出刃<sup>で</sup>を構えたが、清い目で凝<sup>じつ</sup>と視<sup>み</sup>ると、庖丁<sup>うら</sup>の峯<sup>かみ</sup>を返してとんと魚頭<sup>うしづか</sup>を当てた、猿<sup>ひつ</sup>の一打<sup>うち</sup>、急所があるものと見える。片手おろしに鱗<sup>うろこ</sup>を両面にそいで、はじめて袖口から白い手を出して、腮<sup>えら</sup>を圧<sup>おさ</sup>えて、ぎりりと腹を。

「雪代、雪代。」

その人も覗いて立つた。

「水、水。」

「ほッ。」

と言う……姿に似ない掛声で、雪代は、ギイ、ギイ、キクン、カッタンと、古井戸に、白梅のちりかかる風情で、すんなりした、その肩も腰も靡なびかせる。

「ははあ、床下の鉄管で引いたんだね。」

もくもくもくと湧わきだ出す水で、真赤まっかな血を洗いながら、

「嫁ねえさん、嫁ねえさん。」

「はい。」

と二ふたつ竈べっついの大鍋おおなべの下を焚たきつけていた、姉あねさんかぶりの結綿ゆいわたの花嫁が返事をする  
と、

「その大皿と、井を——それ、嫁ねえさん、そっちの戸棚。」

この可憐なのと、窈窕ようちようたると、二人を左右に従えて、血ぬった出刃さきの尖を垂直に落  
して、切身の目分量をした姉御は、腕まくりさえしないのに、当時の素裸の若い女を現実

した。

「槇村さん、——そこに柿の樹がありましたよ。」

八郎は流<sup>ながし</sup>の窓から指<sup>ゆびさ</sup>して、

「あの一番上の枝に草鞋<sup>わらじ</sup>が一足ぶら下っていたんですよ。いつか私が来た時に、五月ですね。土地<sup>とち</sup>子<sup>っこ</sup>だが気がつかなかった。どうしたんだって聞くと、裏<sup>うち</sup>の家<sup>うち</sup>へ背戸口から入った炭屋<sup>はき</sup>の穿<sup>はき</sup>かえたのが、雪が解けて、引掛<sup>ひっか</sup>つたんじゃあない……乗<sup>ひ</sup>ってるんだって——」

「お目に掛けたいようですわ。」

と私に、雪代が言つた。

「しかし、この土地も開けたよ。何しろ、お母<sup>つか</sup>さんが、嫁<sup>よめ</sup>さんと呼ぶのに、姉<sup>ねえ</sup>さん姉さんは難<sup>ありがた</sup>有<sup>い</sup>いよ。」

店で息子の声がして、姉さんかぶりをちよつとはずしながら出て行く、結綿の後姿を見ながら八郎が言うと、

「……お恒<sup>つね</sup>——じゃ兄さんのお気に入るまいと思つてね、いえ、不断も、もうずっと奉つています。……でも、時々……お恒——とやる事。……」

庖丁を一つ当って、

「何てつたつけね、堅くき、勿体らしくき。」

雪代が微笑みながら、

「……なきにしもあらず……沢山よ、ほほほ。」

#### 四

「さあさあ、おつたて追立を食わないうちに、君子はほうちゆう庖廚を遠ざかろう。お客様はそちらへ

——ちよつとぼくは、ここの仏間というのへ御挨拶。」——

蔵前の違棚の前に、二人のめりんすゆうぜん唐縮緬友染の蒲団が設けてあつたが、私と肩を別つようにして、八郎がはしこたん階子段下の小間へ入った。大方そこで一拝に及んだのであろう。雪代の手から、私が茶を受け取った時であつた。

仲仕切の暖簾に、人影が、そば降る雨に陰氣に映すと、そこへ、額の拔上つた、みあげじ見上皺わを深く刻んだ、頬のげっそりこけた、ばさばさ乾干びた、色の悪い婦おんなの、それでも油でかためた銀杏返いちようがえしをちよきんと結んだのが尖つて、鬱金木綿うこんもめんの筒袖の袖口を綿銘仙の下から覗のぞかせた、炭を引摺ひつつかんだような手を、突出した胸で拝むように組んで、肩を窄すばめ

ながら、萌黄もえぎの綿てんの足袋で、畳さぐを搜るように出て来た。その中仕切——本格子の板戸を隔てて立った首が、ちょうど柵の福助どのと合った時、失礼だが、私はその女房が化けたかと思つた。

仏間の敷居へ、もつそりと膝を支くと、

「あんさん、」

と、べろりと赤爛あかただれに充血した瞼まぶたで、凝じつと視み上げた、その目がぽろりぽろりと、見る見る涙に塞ふさがつた。

「うむ、お久さんか。」

八郎の顔は、いま私からは見えなかつたのである。

「お達者でねえ……」

「いや、一向どうも。」

掠かすれ声して、

「もう、いつか、いつかから、ほんに逢いたい逢いたいと思うて、どれだけ、何年になる事やら。」

と、言葉尻が泣声で切れて、ひよいと刎はねるように両袖で顔を隠した。何だか滑おどけたよ

うに見えつつも、私はひしと胸を打たれる。

「さあ、お当り。」

お悦がその中へ箱火鉢をどさんと置いて、

「ずっと中へお入んなさい。——ああ、ええ、分ってます。」

どうやら半分は、私に対して八郎が心づかいをしたのを吞込んだらしい口振だ、と思うと果せるかな、盆に、一銚子、で、雪代が絵姿のように、薄面影を暗い茶の間から、ほんのりと顫あろわれて、

「先生、あの、ちよつとお一口。」

「これはどうも、」

「お酌は拙へたですよ。旦那が気が利かないから、下戸げこの処へ、おまけにただ刃もんめの妓こなんですから。」

と、お悦は直ぐまた台所へ。

お久という人は、やつとその火鉢の縁へ、鬱金うこんの袖口を引張ひっぱって、

「……思つたより、あんさんは若いこと。」

「うむ、何、いやどうも何だ、さつぱりだ。」

「一度お逢いした時から、もう二十四年か五年になりますね。」

「そうかなあ。……何しろ、何が何だか分が解わけらないんだからな、お互に。」

「いつも、ほんに、おたよりをしたいと思つても、私は自分では手紙がかけず、震災のあつた時なんか、遠い北海道の果はてに居て、どれほどお案じした事やら、それでも、まあ、御無事でねえ。」

「わずかに命のあるばかりさ。」

「それでも、まあお互に息災で居れば、こうやつて顔を見られますぞね。ほんとうに逢いとうてねえ、何年も何年も毎晩夢に見ぬ事はないのです。その夢にかつて、はつきりした顔は分らんほど遠々しゆうて、……この春も、やつとお処が知れて、たよりをしたけれど……」

と、くいしばつたような涙になる。

「いや、御不沙汰をしたよ、」

また顔にあてた袂たもとをはずして、

「それはお忙しい事は知れているけれど。」

「大して忙しい事もないんだがね。名も顔も知らない御亭主のある細君もとの許へは、うつか

り返事は出せないよ。誰も別に悪戯いたずらをするとも思わないけれど、第一代筆だろう。きみだか何だか分りやしない。何人なんびとに断つて、俺おれの妻と手紙の遣取やりとりをする。一応主人たるべきものに挨拶をしろ！ 遣兼ねやしない……地方いなかは煩うるさいからな。」

「煩いぐらいで……こんなに私が思うているものを、それに、そんな、そんな内の人ではないのです。」

「そりや何より結構だ。……そうかい、いやに曲ねけてもいず、きみに邪慳じゃけんでもないのだね。」

「ただ……困つてはいるけれどね、——何にしたかて、兄妹ですもの。」

私は酌をうけながら、ふと雪代の顔を見た。美しい人は領うなずくように一重瞼ひとえまぶたを寂しく伏せた。

「何だか、縁づいた総領の娘が、病気で帰っているんだって……」

「ええ、縁があつて、一昨年おとし十七で遣りましたがね、厄かねえ、秋のはじめから目を煩みうて、ちよつと治らんもんですから、診みてもらうと、トラホームやつて、……それでねえ——あんさん煙管きせるを貸してたあせ……今朝から御飯も欲しゅうない、気がせいね、忘れて来た。」

「喫<sup>の</sup>みたまえ。……そうだ、煙草<sup>たばこ</sup>を喫<sup>や</sup>るんだっけな。」

「女だてらやけれど、工場で覚えまして……十四の時から稼ぎに遣られてねえ。」

「その時分だっけな、一度ちよつと夢のように逢ったのは——」

「いんね、十七でいまの家へ一度縁づいたけれど、姑<sup>しゅうと</sup>さんが余り非道で、厳しゅうて、身<sup>か</sup>体<sup>からだ</sup>に生<sup>なまきず</sup>疵<sup>ず</sup>が絶えんほどでね、とても辛抱がならいで、また糸<sup>いと</sup>繰<sup>くり</sup>の方へ遁<sup>に</sup>げていた時でしたわ。」

「ああ、じゃあ、それからまた繕<sup>より</sup>が戻った次第<sup>わけ</sup>だな。」

「お腹<sup>なか</sup>に嬰兒<sup>こども</sup>が居たもんでねえ、いろいろ考えては見ただけれど、またお姑<sup>いじ</sup>に苛<sup>いじ</sup>められに……」

……

「で、子供たちは幾<sup>いくたり</sup>人だい。」

「えへ。」

と罅<sup>えみわ</sup>裂れたように、口許<sup>くちもと</sup>で寂しく笑つて、

「十一人や。」

「産みやがったなあ！ その身体<sup>からだ</sup>で……」

「仕方がないもの。」

「御亭主は幾つだ。」

「六十五や。」

「おッそ  
恐るべく壮だなあ。」

「それでね、六人とられてしもうて、いま五人だけですがね、ほんにね、お産の苦みと、  
十月の悩<sup>なや</sup>みと、死んで行くものの介抱と、お葬式の涙ばかりで暮すぞね。……ほんにね、  
北海道に十六年居る間でも、一人を負<sup>おん</sup>ぶして、二人の手を曳<sup>ひ</sup>いて、一人を前に歩<sup>ある</sup>行かせて、  
雪や氷の川端へ何度行つた事やらね。因果と業<sup>ごう</sup>や。私みたいに不<sup>ふ</sup>幸<sup>しあわせ</sup>なものはないぞね、  
藁<sup>わら</sup>の上から他人の手にかかつて、それでもう八歳<sup>やっつ</sup>というのに、村の地主へ守<sup>もり</sup>児<sup>り</sup>の奉公や。  
柿の樹の下や、廐<sup>うまや</sup>の蔭で、日に何度泣いたやら。——それでもね、十ウの時、はじめて両  
親はあかの他人じや、赤子の時に村へ貰われて来た、と聞かされた時ほど、悲しかった事  
はなかったぞね。実の親の家に居れば、何が何でも、この兄<sup>あに</sup>さんの……妹や。」

「恐縮だよ。」

「実のねえ、両親の顔も声も知らんのやけれど、自分で児<sup>こ</sup>を持って覚えがあるぞね、たと  
え、どんな辛い思<sup>おも</sup>いをしようと、食べるものは食べいでも、どんなに嬉しいか、楽しいか。」  
「恐縮だよ。」

「ほんに、他人に育てられてみんな事には、その辛さは分らんぞね。」

「恐縮だよ。」

「それを、それを、まだ碌に目もあかん藁の上から、……町の結構な畳の上から、百姓の土間へ転がされて……」

「少しお待ち！ 恐縮はするがね、お母さんは大病だった——きみのお産をして亡くなつたんだ——が、きみを他所へ遣つたお父さんやお祖母さんのために、言訳つて事も無いが話がある。私も九つぐらいな時だ、よくは覚えていないけれど、七夜には取揚げ婆が、味噌漬で茶漬を食う時分だ。まくりや、米の粉は心得たろうが、しらしら明でも夜中でもアルコールで牛乳を暖めて、嬰兒の口へ護謨の管で含ませようという世の中じゃあなかった。何しろ横に転がして使う壇なぞ見た事もないんだからね。……可かい。それに活計むきに余裕があるとなれば、またどうにもなる。いま、きみは結構な町の畳からと言つたけれど、母親の寝ていた奥の四畳は破障子の穴だらけだ。しかも雪の中の十二月だ、情ない事には熱くて口の渴く母親に、小さく堅めて雪を口へ入れたんだけれど、降たての雪はばさばさして齒に軋むばかりで、呼吸を湿らせるほどの雫にならない。氷がないんだよ。甘露とも法雨とも、雪の雫が生命の露だつて、お母さんが、頂戴々々というもんだから、若い

可愛い嫁の、しかも東京で育ったのが、暗い国へ来て、さぞ、どんなにか情なからうと最<sup>なげ</sup>惜<sup>とし</sup>がつて、祖母<sup>おばあ</sup>さんがね、大屋根の雪は<sup>すべ</sup>にる、それは危いもんだから、母親の寝ていた下屋の屋根を這<sup>は</sup>つて、真<sup>ま</sup>中は積<sup>まん</sup>つて高い、廂<sup>ひさし</sup>の処まで這<sup>い</sup>つて出で、上の雪を搔<sup>か</sup>いて、下の氷柱<sup>つらら</sup>は毒だし、板に附<sup>く</sup>着いたのは汚し、中の八分めぐらいな雪の、六方石のように氷つているのを搔<sup>か</sup>いて取つて、病人に含ませるんだが、部屋の中はさすがに鉄瓶の湯気や炬燵<sup>こたつ</sup>のぬくもりで溶けるだろう。階<sup>はし</sup>子<sup>ご</sup>段<sup>だん</sup>を上り下りするように、日に幾度屋根へ出入りをしたか知れないとき。観音様に見えますと云つて、凝<sup>じつ</sup>と優<sup>し</sup>しい姑<sup>しゅうと</sup>の顔を見ながら、苔<sup>つばみ</sup>の枯れる口を開けた、お母さんのおもいも、察<sup>さ</sup>するが可<sup>い</sup>いよ。きみ、花を飾った駕籠<sup>かご</sup>に乗つて江戸芝居を見た娘がそれだもの、何も時節だ。……冷いようだが、いや、寒いようだが、いや薄情だと言えばそれまでだが、農家で育つて、子守をして、工女から北海道へ落ちたつて、それほど情<sup>なさけ</sup>ながつたり、怨<sup>うら</sup>めしががつたりする事はなからうと思う。

が、どうだい。

何しろ、そんな中だもの、うまれたての嬰兒<sup>あかんぼ</sup>が育てられるものか。あの時、もしも縁のあつた田舎へ養女に遣らなかつたら、きみは多分育たなかつたらうよ、死んじまつたかも知れないんだ。」

「それですから、それですから、私はいっそ死んだ方がと、昨日も、今日も……」

「まあ、待ちなよ。……亭主が出来て、十一人か、児を拵こしらえているじゃあないか。贅ぜい沢たく

な事を云つて、親を怨うらむな、世間を呪のろうな！……とは言うが、きみの身の上は気の毒だと思

う。けれども考えて見るが可い、……きみは北海道の川端か、身投げをしようとするの

に、小児こどもを負おぶつたり抱いたりしたろう。親子もろともならある意味で本望だ。

母おつかさんはそうじゃあない、もう助からない覚悟をして、うまれたばかり、一度か二度か、

乳を頬ほ辺ぺたに当てたばかりの嬰兒あかんぼを、見ず知らずの他人の手に渡すんだぜ。

私は、悲しい草双紙の絵を、一枚引ひちぎつたように、その時の様子を目に刻んで知つて  
いる。

夜だ——きみの父親になつた男は、表の間まにでも待つていたろう。母親になるのが——

私も猿の人真似で、涙でも出ていたのか洋燈ランプの灯が茫ぼうとなつた中に、大きな長刀なぎなた酸漿ほおずき

のふやけたような嬰兒あかこを抱いて、（哀別わかれに、さあ、一目。）という形で、括くくり枕の上へ、

こう鉄漿おはぐろの口を開けて持出すと、もう寝返りも出来ないで、壁の方に片寝でいたお母さ

んがね、麻の顱はちまき卷まきへ掛かつた黒髪かみがこぼれて横顔で振向いた。——目は今……私の目にも

見えない。」

言が途切れた。ことば

「——鼻筋が透徹すきとおするように通つて、ほんのりと齒と唇が見えた……それなりがっくりと髪も重そうに壁を向いた処へ、もう一度、きみの母親がのしかかつて嬰兒あかんぼを差出すと、今度は少し仰向けになつたと思うと、お母さんの白い指が、雪の降止もうとするように、ちらちらと動いた、——自棄やけに鉄漿おはぐろの口が臭くつてそいつを振払つた、と今の私なら言うんだが、もうこの身で泣くのに堪えられない、思切らせておくれ、と仕方をしたんだろう。——あとは知らない。しばらくすると、戸外おもてを草鞋わらじの音がびしやびしやと遠のいた。」  
聞く方は泣じやくつて、

「もう、怨みもどうもしませんぞね。よそで聞けば、十四五まで着られる柔かい着もの一ひ葛籠とつづら、お金子かねもそれぞれ私につけて下さつたそうながね、私は一度かつて袖を通した事もないのです。父親はそうでもなかったけれど、草鞋わらじの音の、その鉄漿おはぐろの口は蛇体や、鬼でしたぞね。それは邪慳じゃけんな慾張りや。……少しは人情らしいもののあつた養父てておやの方が——やつぱりどこまでも私の不幸や——早く死んでからというものは、子守で泣かせたあげくが工場へ遣られて、それが三日おき四日おきに、五銭十銭と取りに来る……月末つきすえの工賃はね、嫁入支度に預るいうて洗いざらい持つて行つて、——さあ、否いやでも応でも今

の亭主へ嫁るといふと、それこそ、ほんに、抱えるほどな、風呂敷づつみもくれんぞね。どれほど肩身が狭かったやら……その裸が、またお姑の氣に入らんのですがね。

どこまで因果が続く事か。……また今度、あの娘の婿は、年紀も少し。」

「幾歳だい。」

「二十一や。」

「<sup>はや</sup>迅い奴だな、商売は。」

「<sup>まさえ</sup>蒔絵の方ぞね。」

「結構じゃあないか。」

「それや処がね。まだ見習いで、十分にのうてねえ、くらしはお姑さんが、おもに取仕切つてやもんですから、あんさん、それは<sup>ひど</sup>酷いぞね——半月おきには、下駄の齒入れや、使いまわしも激しいし……それさえ内へ強<sup>ねだ</sup>請りに来るがね。（母さん十日お湯へ入りません、お湯錢たあせ、）と内証で来る。湯の具までもねえ、すれ切<sup>きれ</sup>や、（母さん、……洗いgae買うてたあせ、）とソツと来るし……」

「<sup>なさけ</sup>情ねえ事を云う。」

私も雪代と思わず顔を見合わせた。

「情ないどころではないのですぞ。そのあげくがトラホームや、療治は長びくし、うち中へうつるいうて、今度返されて来たですがね、病院へ遣ろうにも、それでうてさえ、内も楽どころではない処へ。」

「もん句は亭主に言えよ、亭主に。」

八郎の声はやや苛<sup>いらだ</sup>立つた。

「それを言うたかてねえ、出来るようなら可いのですけれどもねえ。」

「きみの亭主にだよ、娘の事だ。——いや婿にだよ、誰がそんな事を知るもんか。」

「そう、もぎどうに言わいでも。」

お久という人はまた袖を顔に当てた。

「私にかて、私にかて——生れてから、まだまだ一日も、一日どころか一度でも、親身の優<sup>やさし</sup>い言葉ひとつ聞いた事のない私に——こんなに思いに思うて、やっと逢ったのに、」

「抱いたつて擦<sup>さす</sup>つたつて何にもならない——現金でなくつちやあ、きみたちは駄目なんじやあないか。」

「あれ、あんなまたもぎどうな。」

「さあさあ、茶碗の一つぐらい引<sup>ひっ</sup>くり覆<sup>かえ</sup>つたつて構わない。威勢よく、威勢よく！……さ

あよ。」

と結綿ゆいわたのに片端昇かつがせて、皿小鉢、大皿まで、お悦おえきが食卓かっくだを昇出かっぎだした。上には知らぬ間の大鯛おだいが尾はを刎はねて、二人の拔出はきだした台所に、芬ぶんと酢すの香かの、暖ぬくい陽炎かげろうのむくむく立たつて靡なびくのは、早鮎はやずしの仕込みらしい。

「兄さん——さあ、お久さん……こちらへ。……」

「それでねえ、——金銭をどうと云うではないけれどね、亭主うちのひとをはじめてに、娘のその婿むこもね、そりや謡うたが好きなのですぞ。……息子こもねえ、一人は鉄葉屋ブリキヤの方かたを、一人は建具屋けんぐの弟子でしになつてゐるのですが、どっちも謡うたが大おほすきや。二人ともねえ、好きやぐらいか、あんさんのお弟子でしにもなりたいたとねえ……血統ちすじは争あらそわれぬもんじゃぞね。」

お悦おえきが膳でんの上うへを按排あんぱいしながら、これを聞きくと、眉ひそを顰ひそめた。八郎はちろうの顔色かおいろが思い遣おもひやりられ

る。「婿むこも……やつぱり、自然つなと繋つながる縁ゆかりやよつて、あんさんにお逢あいして、謡うたやら、舞まいとかいうものやら。」

「べらぼうめ、」

猛然とつぜんとして八郎はちろうが、尖とがつた銀杏返いちようがえしに、膝かを更かわして敷居しきいを出でた。

「そういう了りようけん簡かんだから。……チョツ、さあ、御馳走だ。お食べと云ったら、鰯たらふく食うんだ、遠慮をしないで、食うものはさつきと食えよ。謡どころか、お互にすぎ腹がぐうぐう言つてら。」

## 五

「——伯父、甥が何だ。……姪の婿がどうしたっていうんだ。他人様の大切な娘を……妙と齡しころ十七八だつて。（お月様いくつ）のほかに、年紀としばかりで唄になるのはその頃の娘なんだ。謡をうたう隙ひまに拝ひまんでるが可いい。私なんぞ、二十二三の中年増に、お酌を頂いたばかりで……この通り。」

八郎は雪代の酌を受けて、恭うやうやしく頂いた——その癖酌を受けたのは今ばかりではない、もういい加減酔っている。実は私も陶とうぜん然ぜんとしていた。

「これ、土手で売る馬肉じゃあないが、蹴けころ転てんの女郎の切売を買ったつて、当節では大錢だろう。女房は無錢ただで貰うんだ——娘に……簞たんす笥す、長持から、下駄からかさ、傘かさ、枕のしに熨斗のしが附ついてるんだぜ。きみの許とこは風呂敷にもしろ、よしんば中が空からだつて、結びめを蝶々にしたろう。

裸体でそいつを引背負つたつて、羽の生えた処は、天津風雲の通路じやないか。勿体なくも、朝暗いうちから廊下敷居を俯向けに這わせて、拭掃除だ。鍋釜の下を焚かせ、水をくませる、味噌漉で豆腐を買うのも、井で剥身を買うのも皆女房の役だ。つかいはや間の隙にはお取次、茶の給仕か。おやつの時を聞けば、もうそろそろ晩のお総菜拵えにかかつて、米を磨ぐ。……皿小鉢を洗うだけでも、いい加減な水行の処へ持つて来て、亭主の肌襦袢から、安達ヶ原で血を舐めた婆々の鼻拭の洗濯までさせられる。暗いあかりで足袋の継ぎはぎをして、鞆あかぎれの手を、けちで炭もよくおこさないから……息で暖める隙もなしに、鬼婆の肩腰を、擦るわ、揉むわ、で、そのあげくが床の上下し、坊主枕の蔽いまで取りかえて、旦那様、御寝なれだ。

野郎一生の運が向いて、懷を払いた、芸妓、女郎に惚れられたつてそうは行かない。処を好き自由に抱こに及んで、夜の明けるまで名代なしだ。竜宮から小槌を貰つたつて、振つても敲いても媽媽は出ねえ。本来なら龕に納めて、高い処に奉つて、三度三度、お供物を取換えて、日に一度だけ扉を開いて拝んでいなけりや罰が当ら。……

処を……ありがたい神仙の広大な慈悲の思召しで、それには及ばず、世間のならい、好き自由にして摺り切れるまで使つておいて、何を、禪も買つてやらない、里の母親の処

へ、湯銭の無心、下駄の齒入まで強請らせるとは何事です。女房は何がたのみだ。せめて病やみわす煩わづらいの時、優しい言ことばも掛けられて、苦い薬でも飲ましてもらおうと思えば、何だ、トラホームは伝染うつるから実家さとへ帰れ！ 馬鹿野郎、盲目めくらになつてボコボコ琴でも弾ひきやがれ。何だ、妹の娘で、姪の婿のよしみをもつて俺に謡を聞かせろ——まいを舞え。わるく、この酒でちらツかな目の前五六尺が処つらへ面を出して見ろ、芸は未熟でも張はり扇おうぎで敲き込んでるから腕は利くぞ。横外よこぞつぽう頬を打撲ぶつくらわせるぜ。

またその鉄葉屋ブリキヤと建具屋の弟子だつてそうだ、血統ちすじは争われぬ、縁つなに繋なつて能役者が望みだ、氣障きざな奴だな。役者になる隙ひまがあつたら、——お久。……」

と口を曲ゆがめて横よこざまに視みた。

「お前のその蝦蛄しゃこの乾ひもののようになつた、両手の指を、交かわる交がわる這はつて舐なめろと言え。……いずれ剣劇や活動写真が好きだろう。能役者になる前に、なぜ、鉄鎚かなづちや鑿のみを持つて斬あ込んで、姉あねを苛いじめるその姑しゅうとば婆ばを打ぶちのめさないんだい。——必ず御無用だよ。そういうかたがたを御紹介とか、何とか、に相成るのは。」

「あんさんは酔つてですね。」

と涙も忘れて、胸も、空洞うつろに、ぽかんとして、首を真直まつすぐに据すえながら湯ふの鮎わんの碗さまを冷

して、箸をきちんと、膝に手を置いた状は可哀である。こつちには、蟹の甲羅——あの何の禁厭だか、軒に鬼の面のごとく掛つたのを読者は折々見られたであろうと思う——針を植えた赫と赤いのが、烈々たる炭火に掛つて、魔界の甘酒のごとく、脳味噌と酒とぶつと煮えているのに。――

「お悦さん——姉さん——私の言う事は間違つてゐるだろうか。」

「槇村先生にお聞きなさい。」

私は、……いまふと妙な形容をしたのに対して、言憎いが、甲羅酒を掬つてただ笑つた。

「邪慳かしら、薄情か知らん、たとえば、甲羅酒のように聞こえますか。それとも雪代さんの顔……」

「可厭だ、小父さん。」

「いや、天人だよ、大したものですよ。茨蟹のようか、それとも、舞台で……明日着ける……羽衣の面のようか、と云うんだよ。」

「どっちでも可いから、何しろ、まあお食んなさいよ。」

「名言だなあ。」

八郎は肩をのめらした手で膝を敲いた。

「何事もこれ食うためだ。が、どっちでも可いたって、憚りながら雪代さんの顔は舐めさせもしますまい。食うとなりや、蟹の面だ。ぐつぐつぶくぶくと煮えて、ふう、ああ、旨しそうだ。」

と被さるように鼻を持って行つたと思うと、

「ニャーゴー！」

ああ、そこへ猫が出たかと思う、私さえ吃驚した。いわんや、台所から盆を運んで、階子段の下まで来かかった結綿は、袖を刎ね、棲をはらりと乱して台所へ振向いた。

「あれえ、お勝手へ、野良猫が。」

餌を返したと見える。

雪代がちよつと襟を合わせながら、

「お母さんのよ。——困るわね。」

「真に迫りましたよ。」

と私も言つた。

「だって、兄さんが嗅ぐんだもの。」

「天人からはじまつて、地獄、餓鬼、畜生だ。——浅間しさも浅間しい、が、人間何より

も餌食えじきだね。私も餌食さえふんだんなら、何も畜生が齒を剥くように、建具屋の甥や、妹の娘の婿か、その蒔絵屋まきえやなんか罵のしりやしない。謡も舞も、内に転がしといて見せも聞かせもしようがね。」

坐り直つて、なぜか、八郎は慚然ぶぜんとした。

「——姉さん、ここに居る、この人が、」

八郎は片頬かたほで妹を斜ななめにさして、

「無心を云う警戒でもするようで浅間しいが、聞いて下さい。私たちは職業として、主要おもな収入高とりだかと言え、その全体と言わないまでも八九分までは謡の弟子だよ。弟子を取るんだよ。客さきさえ良けりや、盆暮の附届けだけでも——云うことは下等だがね——一年はくらせよう。……はずんで、電話を呈しよう、稽古所を承ろう。家を一軒——なぞというのは、皆謡みんなの弟子なんです。

榎村さんも御存じの通り、……処を、私は弟子を取りません。私は舞台で能は演やるが、謡の師匠じゃあないと言うんです。お聞きの通り、近頃は建具屋の弟子小僧まで、伯父の内弟子になつて樂をして食おうという不了簡を起すほど、この職業も、盛さかんと云えば盛だけれど、腹のくちい連中が運動がわりに声を出すんで、能を見ようツて気はちつともない。

——また、素人にや面白くないからね。芝居や活動写真のようにには行かないんです。だから御覧なさい。——明日の催しだつて同じ事さ。……手ん手が手本を控えて、節づけと目張りツこで、謡ばかり聞いている。夢中で浮かれ出すと、ウウウと頭を掉つて、羅宇の中を脂が通るような声を出すんだから堪りやしません。死ぬ苦みで修業をした、舞台の、その時々シテなんざ、まるで御連中の眼中にやないんだから。——そうかつて先方はお客だ、業も未熟だし、決してもんくは言やしない、言わないかわりに、一人だつて紳士方の腹こなしや、貴婦人とかいう媽々天下の反返りだの、華族の後家の退屈凌ぎなんか弟子には取らない。また取れようもないわけなんだ。能役者が謡の弟子を取るのは、歌舞伎俳優が台辞の仮声を教えると同じだからね。舞台へ立つては、早い話が、出来ないまでも、神と現じ仏と顕れ、夜叉、鬼神ともなれば、名将、勇士、天人の舞も姿も見しうとする。……遊女、白拍子はまだしも、畏多いが歌の住吉明神のお声だつて写すんです。謡本と首引きで、朱筆で点を打ったつて、真似方も出来るもんか。

第一、五紋の羽織で、お袴で、革鞆をぶら下げて出稽古に歩行くなぞ、いい図じやあないよ。いつかもね。」

八郎は呷と煽つて、

「省線電車——まあ、その電車に乗ったと思っておくれ。真夏の事でね……五十面をてら磨いて、薄い毛を白髪染さ、油と香水で真中からきちんと分けて、——汗ばむから帽子を被りません——化粧でもしたらしい、白赤く脂ぎった大面の頰を突出して、仰向けに薄目を開けた、広い額がてらてらして、べつとりと、眉毛に墨を入れたのが、よく見える。紗の横縞の袴を突張らかして、折革鞆を傍に、きちんと咽喉もとをしめた浅葱の絹の襟を扇で煽ぐと、しやりしやりと鳴る薄羽織の五紋が立派さね。——この紋が御見識だ。何と見えます——俳優ともつかず、遊芸の師匠ともつかず、早い話が、山姥の男とこめかけ

妾の神ぬしの化けたのだ。……間が離れて向う斜めに、しかも反つていたのを、ちやうど私の傍に居合わせた、これはまた土用中、酷暑の砌を御勉強な、かたぎ装の本場らしい芸妓を連れた、目立たない洋服の男が居て、件の色親仁を視ながら、芸妓と囁いて、何だろう？——（分った、能役者だ。）と——言った。私は慄然として膚粟を生じた。正にそれに相違ないのだから。……流儀は違うが、額も、鼻も、光る先生、一廉のお役者で、評判の後家——いや、未亡人——いや、後室たらしさ。

——あとで知ったが、その言当てた男は、何とか云う、小説家だったって——餅屋は餅屋だと思つたよ。——

そんな脂切ったのがあるかと思うと、病<sup>やみ</sup>上<sup>あ</sup>りの蒼<sup>あお</sup>つしよびれが、頬<sup>ほ</sup>辺<sup>べ</sup>を凹<sup>くぼ</sup>まして、インバネスの下から信玄袋をぶら下げて、ごほごほ咳<sup>せき</sup>をしながら、日南<sup>ひなた</sup>を摺<sup>すり</sup>足<sup>あし</sup>で歩<sup>ある</sup>行<sup>い</sup>て行く。弟子廻<sup>なまけ</sup>りさ。（どうなすつた先生。）——（あいかわらず腎臓<sup>じんぞう</sup>が不可<sup>いけ</sup>ませんでな。）なんぞはまた情<sup>なさけ</sup>ない。が、決して悪く言うんじゃない。絞<sup>ふと</sup>って肥<sup>ふと</sup>つたのも、吸<sup>お</sup>われて瘦<sup>や</sup>せたのも、皆これ、お互に食<sup>く</sup>うためさ。今日<sup>こんにち</sup>の餌<sup>え</sup>食<sup>じき</sup>ゆえです。汝<sup>おのれ</sup>一人<sup>いちにん</sup>ならどうにか中<sup>な</sup>くらいにでも食<sup>く</sup>えようが、詮<sup>せん</sup>ずる処<sup>ところ</sup>、妻子<sup>けんぞく</sup>眷<sup>けん</sup>族<sup>ぞく</sup>、つづいては一類一門のつながりに、稼<sup>かせ</sup>がないではいられないからだよ。

やつと夫婦で、餌<sup>え</sup>を拾<sup>え</sup>うだけで、済<sup>え</sup>んでるから、どうにか能役者の真似<sup>まね</sup>も出来る。……この上児<sup>こ</sup>でも出来て御覧、すぐその日から革靴<sup>かばん</sup>を提<sup>ひ</sup>げた謡<sup>うた</sup>の師匠だ。勿論謡<sup>うた</sup>の師匠なら謡<sup>うた</sup>の師匠専門は結構だ。

が、そうなりや覚悟をする。……夫として、親として、女房子を食<sup>え</sup>わせるのは義務だからね。私は成るべくは謡<sup>うた</sup>の師匠にはなりたくない。ただしそれでも餌<sup>え</sup>の足りない時は、まづ女房の前へ手について謝<sup>まう</sup>まるんだ。他<sup>よそ</sup>様<sup>さま</sup>の大切<sup>たいせつ</sup>なお娘<sup>むすめ</sup>ごの玉のごときお身体<sup>からだ</sup>を自由<sup>じゆう</sup>にいたし申<sup>まう</sup>訳<sup>わけ</sup>はありません。おはぐくみ申<sup>まう</sup>腕<sup>うで</sup>がございせんから、重々<sup>わづ</sup>お詫<sup>わび</sup>の上、お身体<sup>からだ</sup>だけ、お返し申<sup>まう</sup>上げます。女にすたりはない。いず方<sup>かた</sup>へなりとも御自由にお使<sup>つか</sup>い下さいま

しとね。誰がそんな中で五人七人小児<sup>こども</sup>を産ませる、べらぼうがあるもんか。女の方は産まないたつてそうは行かねえ。身鼻<sup>みびい</sup>をするんじやあないけれど、第一腕力に掛けたつて女は弱い、従わせられる、皆亭主<sup>みんな</sup>の不心得だ。

悪くそんな奴<sup>はびこ</sup>が蔓ると、たちまち、能職が謡屋<sup>かね</sup>を兼るような事が出<sup>しゅったい</sup>来る。私がこのままで我を通せば、餓鬼、畜生と言われても、明日の舞台は天人だ。有象無象<sup>うぞむぞう</sup>が現われて、そいつにかかずらうようになると、見た目は天人でも芸は餓鬼だよ。餓鬼も畜生も芸なら好い、が、奈落へ落ちさがるのが可<sup>おそろし</sup>恐いんだ。

私は能役者で、今度だつて此地<sup>こつち</sup>へ来たのさ。謡の師匠なら、さき様の歓迎会や披露<sup>ねだ</sup>どころか。私の方から、顔出しもすりや、挨拶にも廻つて、魚市で、お悦さんに鮒<sup>ねだ</sup>を強請<sup>ひま</sup>る隙に、祝儀づつみの十や十五は懷中<sup>ふところ</sup>へ入れて帰つて、トラホームの療治代ぐらい、即座に弁ずるんだが、どうだい。」

八郎は胸をしめて妹を見た。

「きみ、分つてくれたかい。」

お久という人は、きよとんとしていた。

「あんさんは、ようものを饒舌<sup>しゃべ</sup>つてや。」

(向の山に猿が三匹)の小猿にされて、八郎はぽかんとした。

身勝手な事を……しかも酔っていて饒舌つたのである。実は友だちの私にもよくは分らない。が、その人となりと、境遇との婦人には、私の分らないほども分らなかったろうと察する。

「どうだい、綺麗な奥さん——いかがです、姉さん、お悦さん。」

遠慮なく、箸をとつていて、二人とも揃って箸を置いたが、お悦さんの方は一口飲み込むと、酒は一滴も嚙けない婦人の、白く澄ました顔色で、

「ニャーゴー」

「こいつは不可い。」

「お、小父さんお客様。」

お母さんに肖てこれも敏捷い！……折から、店口の菊花の周囲へ七八人、人立ちのしたのをちらりと透すとともに、雪代が迅くも見てとつた。

## 六

——先生、先生、橘先生——これはまたどうした事で。……既に電報で再度までも申出ましたものを、御着おちやくの時間どころか、東京御出発の御通知も下さらず、幹事一同は大狼狽うばい。勿論、催能は明日に迫りましたものを、御到着にならぬという事は断じてないと言ひ、信じてはおりますものの、各々が気ではありませぬ。御歓迎なり、有志の御紹介なり、昨日きのうも三つばかり、そのための会合がお流れと申す始末——

これから、誰彼口々の口上は、読者諸君の想像にまかせた方が可い。

——当方で御指定いたした旅館へはおいでなくとも、先生が御宿泊なさりそうな四五軒、しかるべき旅館も探したが、お見えにならない。最早今夜に迫つては、いずれにせよ、是が非、御着に相違ないと、町中の旅籠屋という旅籠屋の目ぼしいのを、御覧の通りこの人数で——

提灯ちようちんが五張いつはり、それも弓張ゆみはり、馬乗うまのりの定紋つきであつた。オーバアの紳士、道行を着た年配者、羽織袴のは、外套を脱いで小脇に挟んでいる。菊花の土間へ以上七人、軒溝石どぶいしへ立流れて、なお四人ばかり。

——で、なお念のために停車場へも多人数が出ているようなわけで、やつと思ひも寄らない旅店で、お名前を見つけました。それも今しがたの事で。しかも、しかるに御在宿で

ない。しかるにしかる處、何が何とあろうとも 明<sup>みようとち</sup>日の演能に、今夜までおいでのない法は断じてない、ただ捜せ、捜すと極<sup>き</sup>めて、当地第一の料亭、某楼に、橘八郎先生歡迎の席を設けて、縉紳<sup>しんしん</sup>貴夫人、あまた、かつは主だつたる有志はじめ、ワキツレ囃子<sup>はやし</sup>方<sup>かた</sup>まで打揃い、最早着席罷<sup>まかりあ</sup>在る次第——開会は五時と申すに、既に八時を過ぎました。幹事連の焦心苦慮<sup>ひとえ</sup>偏に御賢察願いたい。辛うじて御当家、お内儀、御新造と連立つて、公園から、もみじ見物——

という、そのお悦さんは、世話狂言の町家<sup>まちや</sup>の女房という風で、暖簾<sup>のれん</sup>を隔てに、細い格子に立つて覗<sup>のぞ</sup>いている。

八郎は、框<sup>かまち</sup>の冷い板敷に、ひたりと膝をついたが、そのいわゆる……餅屋は餅屋か、どこに用意をしていた知らん、扇子を帯にさしながら出迎えたのを、きちんと前に置いて、酒<sup>いきおい</sup>の勢で脱いでいたから、着流しのそげ腰で、見すばらしく、土間に乗出すばかり手をつけて、お辞儀をしている。

提灯は吹さらす風とともに、しきりに菊の霜に動いた。

——手繰<sup>たぐり</sup>しめて駆附け、顔を見てまず安心、——が、その安心をさせないで、八郎は——さような晴がましき席へは出つけませぬ、かくの通り食べ酔いまして、この上御酒宴の

席へ連りましては、明日の勤のほどが——と誰も頼まない、酔ったのを枷にして、不参、欠席のことわりを言うのである。

思つても知れよう、これをそのまま引取る法があるものか。

推し返す、遣返す——突込む、突放す。引立てる、引手繰る。始末がつかない。

私でさえ、その始末のつかぬのが道理だと思つた。

中に髻のある立派な紳士が、一公職の名のりを上げた。

「この中には、藩侯御一門の御老体も見えておられる。私も、武士の血を引いておりますぞ。さ、おいで下さい。」

と云つた時は、

「能役者は素町人です、が失礼します。」

と云つた、八郎はぶるぶるした。

皆黙つた。寂然とした。

店に居た、息子も若い衆も居直つたのである。

「酔覚めだよ。」

とお悦が小さな声で、

「雪代、雪代。」

すつと寄ると、

「あ、内の事はお嫁さんにさせないと気まずいね……姉さん、」

嫁御は、もう台所から半身出ていた。

「どこち広袖を出しておくれ、……二階だよ。」

「まあ、小父さん、お寒そうね。」

と雪代が店へ出ると、紺地に薄お納戸の柳立やなだて杵の羽織を、ト、白い手で、踞うずくまつた八郎の瘦やせた背中へ、ぞろりと掛けた。帯腰のしなやかさ、着流しはなおなよなよして、目許めもとがほんのりと睫毛まつげ濃く、苔つぼめる紅梅の唇が、艶つやつや々と、静な鬢しずかびんの蔭にちらりと咲く。

「似合いましたなあ、ははあ、先生。」

「それでは御出席になれますまい。」

「いや、諸君は、何を言う。」

武士の血統は気色ばんで一足出た。

「お聞きなさい——橘さん……いやしくも東京から家元同格の貴下あなたがおいでだと云うで、  
今こん夕せき、申もうし合あい打合せのために出向いた、地謡じうたい、囃子方一同は、念のため、酒席とい

えども、袷かみしもを用意しておるですぞ、何事ですか、この状さまは。」

八郎は紅くれないの八口ひきしを引緊めた。梅が薰うつて柳なが靡なびく。

「最早、こうなれば八郎討死うちじにです。」

「何。」

「そのかわり、明日は羽衣を着て化けて出ます。」

「何だ！」

「ああ、その菊の下は井戸ですよ。」

お悦の高声に、一同は、アツと退ひいた。

が、たちまち一団になつて詰掛ける。

私は思わず、お悦の肩を乗越した。

ここに不思議だったのは、そのお悦の袖の下にあった、円い、白い、法然頭である。こ

の老人は、黒光りのする古茶棚と長火鉢の隅をとつて、そこへ、一人で膳を構えて、こつ

ねんと前刻さきにから一人で、一口ずつ飲んで、飲んでは仮睡いねむりをするらしかったが、ごツつり

布子ぬのこで、この時である。のこのこと店へ出て、八郎と並んで坐ると、片手を膝について、

片手、掌てのひらを斜なめに、その手造りの菊をこう煽あおぐように、

「貴客方、ちよこツとその花を見て下さらんけ。……賞めて下さると、何じや、白いのを賞めて下されば、取次ぎの白粉じや、いろのを賞めて下されば、内の紅じや。一包ずつ、お景物をさしあげる事にいたしますぞ。」

ほたりと笑つて、

「どやろか。」

と云つた。

提灯の灯も黄に白に、菊見の客が帰つたあとで、皆が揃つて座敷へ入つた時、お久という人は、自分の椀小皿をきれいに食べて、箸を置いて、そうしてうしろ向きで膳の上を拝んでいた。

「御覧なさい……あの通りだ。——嘘も大袈裟も、もの好きにしろ、お囃子方は宴会の席へ袴かみしもを持つて出たかも知れないが、いま来た十人が十人、残らず申合わせたように四角な風呂敷ふしづつみと折革鞆たもとを持つていたでしょう。あの中が皆謡本みづなさ、可恐おそろしい。……その他一同、十重二十重とえはたえに取囲んで、ここを一つ、と節を突ついて、浮かれて謡出すのさえあるんです。

その癖、明日になつて、舞台で見たが可い。誰も、富士も三保の松も視ながめちやあいない。

気まぐれに、舞を見るものも、ごま点と首ツぴきだから、天人の顔は黒痘痕さ。」

八郎は恥ずるがごとく、雪代の羽織を引被った。

しかり。——十五の年渠を養子にした、当流の元老にして大家だった養父も正に同じ事を歎いたそうである。上京の当時、八郎は舞台近所の或外国語学家の玄関に書生をしていた。祖父、伯祖父、一統いずれも故人だが、揃って能楽師だった母方のその血をうけて、能が好きだから、間を見ては舞台を覗く。馴染になつて、元老の娘が、五つばかり年紀上だが優しい婦で、可愛い小僧だから、つい親んで、一日、能会の日、中食の弁当を御馳走して、お茶を入れて二人で食べていた。——処へ、装束を袴に直して、扇子を片手に渋い顔をして入つて来た、六十七の老人である。「うまく遣つてるな、坊主、能はどうだ」と言つた。大切な蒲鉾を頬張りながら、「何だか知らないが、小父さんは化けるね。」「何。」「だって、舞台じゃあ、その色の黒い皺くちやな手首の処が綺麗で真白だったよ。」天女の扇を持った手である。元老は当日羽衣を勤めた。「そして、（富士の高嶺幽になり、天つ御空の霞にまぎれ、）という処じゃ、小父さんの身体が、橋がかりの松の上へすつと上つたよ。」「生意気な事を言やがる。」お婆さんの御新姐が持つて来た冷

酒を、硝子盃で、かわりをして、三杯ぐつと飲んだが、しばらく差俯向いて、ニコリとなつて、胡坐を直して、トンと袴をたたくと、思出したように、衝と住居から樂屋へ歸つた。

おなじような事がまたあつた。盲目の景清である。「坊主今日も化けたか。」「化けた……何だか知らない、荒磯の小屋に小父さんが一人居て、——（目こそ聞けれど）……どうかして——（寄する波も聞ゆるは）……と言うと、舞台中ぎあと音がしてね、庵へ波がしら立つのが見えた……魔法を使つたようだよ。」お婆さんの御新姐の手から冷酒を三杯立つづけて、袴に両手をついて、熟とうつむいた。が、渋苦い顔して、ほろほろと涙ぐんだ。「こいつを聞きたいばかりに、俺は五十年苦しんだ。媼さん、驕れ、うんと馳走してくれ。皆一所に飲もう。」後日、内弟子に極める時元老が聞いた——「坊主、修業をして、舞台へ浪が出せるかな。」八郎が立処に、「いけなけりや、バケツに水を汲んで置いて打撒くよ。」

——「尋常に手桶とも言わないで、バケツはどうだ。しかし水を打ちまくかわりに、舞台へ雑巾を掛けます。」と、月を経て、嬉しそうに元老が吹聴した。娘の婿に極った時である。

かくて、八郎は橘の家を継いで、家名を恥かしめはしないのである。

人は呼んで、宗家いへもと同格と渠かれを称たえる。

「分らないな。——まだ世界に一人のあんさんだの、たった一人の妹を言っている！ 一人の妹は分ったから、一人の妹になって来い。そのもじやもじやと生えた身うちの手足を残らずたたき切つてよ。真ばかりなら、蝦蛄しやくこだつて大好きなんだ。六十五歳で十一人うませた親仁おやじだの、その子供だの、またその婿だのを、私が親しいと思えるか、懐しいと思えるか、考えてみるが可い。——何、妹に免じて、逢うだけだつて、煩うるさいな！……そんなことに免じなけりやならないような何だ？ 妹だ。……きようだいは一つ身からだだと？ 御免を蒙こうむる。血肉も骨も筋も一つに溶け合うのは恋しい可愛い人ばかりだ。何？——きようだいは五本の指、嘘を吐つけ。——私には六本指、駢むつゆび指だよ。」

地方は電力が弱くつても、明るい電燈の下へ持出される言葉ではあるまい。が、燈明ばかり陰々とした、その仏間で、八郎の声が聞こえた。

——座敷では人顔の朦朧もうろうとするまで、蟹の脳味噌の再び煮返にえかえる中を、いつの間にか、お久という人は、帰りしなに……「ちよつと」……で八郎を呼出して、連込んだものらし

い。――

「な、六本指はあやまるよ、分つたか。」

言い棄てて、酔過ぎたか、さめぎわ 覚あおじろ 際か、蒼白い顔をして、つかつかと出て来たが、御飯

に添こさえて小皿の小肴こさかなを、（このあたりの習慣である。）手に載せて箸をつけていた、雪代夫人を視みると、どしんと坐つて、

「何を食べてる。」

「篠ささ鰈がれよ。」

「ああ、」

と覗のぞいて、

「東京の柳鰈か――すらりと細い……食つてるものも華奢きゃしゃだなあ。少しおくれ、むし っただよ。」

「可いや厭な、先生。」

「何が先生だい、さあ、 って。」

小指の反つた白魚の目は、紅い指環ゆびわにうつして、消えそうな身を三口ばかり、齒に触りそうにもないのを、あんぐとうけて、むしゃむしゃと嚙かんだと思うと――どたりとそのす

んなりした背に崩込んで、空色地に雪間の花を染模様の帯のお太鼓と、梅が香も床しい細りした襟脚の中へ、やたらに顔を押込んで、ぐたりとなった。

「襟脚の処が三寸ばかり、お前さんに似て美しい。」

と耳許みみもとに囁ささやいたと思えば、背中へ倒れ込んで——その時、八郎は泣いたのだそうである。

私は小さな料亭の小座敷で、翌夜あくるよ、雪代夫人から、対坐で聞いた。

チーン。

すすり泣く声がすると、鈴りんが鳴った。……お久という人の、めんてんの足袋で帰るのを、立合わせた台所から、お悦が送り出すと、尖とがった銀杏いちようがえし返を、そそげさして、肩掛もなしに、冷い頸えりをうつむけて、雨上りの夜道を——凍るか……かたかたかたかたと帰って行く。……

土地に大川通がある。どおり流に添ったのではない。優しい柔かな流に面し、大橋を正面に、峰、山を右に望んで、橋添には遊廓くるわがあり、水には蠣船かきぶねもながめだけに纏もやつてあつて、しかも国道の要路だという、通は賑とおりにぎわっている。

この土地へ来て、第三日目——八郎が舞台に立った——その夜九時半頃、……結ゆいたての円鬘まるまげに薄化粧して、質実じみだが黒の江戸褌えどづまの、それしやにはまた見られない、こうとうな町家の内儀風の、しやんと調ったお悦と、急せき心に肩を揃えて、私は、——瀬戸物屋で——骨董こつとうをも合わせて陳列した、山近き町並の冬の夜空にも、沈んだ燦爛かがやきのある窓飾の前へ立った。

「……ごんせんね。」

「ありません。」

覗くまでの事はない。中でも目に立った、落着いて花やかな彩色いろどりの花瓶はながめが一具ひとつ、まだ飾直しもしないと見えて、周囲一尺、すぼりと穴のあいたようになっていいるのだから。

気の早いお悦が、別して一場合あるだったから、つかつかと店へ入って、

「御免なさい、」

「へい、これは。」

亭主が居合わせた。

「お昼ごろ、連つれの人と頂きました花瓶かびんなんですがね、かなり大きさのあるこれものですから、お店で、すぐ荷造りをして頂くか、それとも一旦、宿の方までお受取りしようか、……とにかく、もう一度うかがう事になっていました……」

「はあ、いえ、それでございますがな。まあ、御新造ごしんぞうさん、お掛けなすつて。旦那だんなもどうぞ。いらつしやいましたよ、つい今しがた、前刻さつぎの旦那かたが。」

「来ましたつて！」

と私の顔を見て、

「一人で？……もつとも一人でしようけれど、どんな風俗なりをしていました。」

ぽんと、馬づらが煙管きせるを払はたいた。

「ええ、それがな、紋着もんつきの着流しで、羽織も着ないで、足袋は穿はいていなさったようですよ、赤い鼻緒の草履を突掛つつかけて……あの廊下などを穿きますな……何だか知りませんが、綺麗な大形の扇を帯に打込んで、せかせかおいでなさつて、（持つて行く。）と突いきな如りおっしゃる。勿論、お代済でございますし、しかし、お風呂敷か何か、と云うのに、（直じきそこだ、直きそこだ。）と、いかさま……川端の料理屋でも飲んでおいでなさつ

たという御様子で、直ぐ、お引抱ひつかかえになりますとな、かなり持ちおもりがするんでやすから、扇をつツ支かいぼう棒にして。……いやどうも、花瓶も見事でございますが、どっちが綺麗かと思うほど、扇もお見事でございましたがな。」

といいいい、これも、怪訝けげんそうに、じろりじろりと視みる。……お悦がその姿で、……ここらでは今でも使う——角つの樽だるの、一升入を提げていたからである。

（——時に、ここで乃聞いましいたのが、綺麗な扇を持った……友だちだから特に讃して言う　白い手とともに舞台から消えた、橘八郎の最初のお消息であつた——）

私はやや狼狽うろたえていた。

次第を話そうが、三日目のこの朝、再びお悦さんが私たちの旅宿おとすに音訪れた。またどんな事情があつて昨日きのうの幹事連が押寄せないとも限らない、早く出よう。支度をするのに、直ぐ能舞台へ出勤するのが道順だから、八郎は紋着を着た。その舞まい袴ばかまを着けるのが実に早い。夜討に早具はやぐそく足だから、本来は、背後うしろへ廻つて、支つきひざ膝ひざで、ちよつと腰板を当てるのが、景情あいともないそうなお悦……（早間に掛けては負けそうもない、四時半から髪結を起したと云う）が、うっかり見ていたから、八郎の袴羽織には初めて接したかも知

れないのであつた。

途中を電車で、私の見物のために、一度いま話すこの大川通で下りて、橋はしたもと袂こすえに、梢は高く向う峰のむら錦葉もみじの中に、朱の五重塔を分け、枝は長く青い浅瀬ながれの流なびに靡いた、

「雪女郎」と名のある柳の大樹を見て、それから橋を渡越した。志す処は、いづれも維新の世の波に、江戸を落ちた徳川の流ながれの末の能役者だったという、八郎の母方の祖父伯父おおじまた叔父、続いて祖母伯母おおばおばまた叔母などの葬られた、名も寺路町てらみちまちというのの菩提寺であつた。――父母の墓は東京にある。――

寺と寺との間に、亡者の住居すまいに石で裏階うらぼしご子を掛けたような、苔こけにすべる落葉の径こみち、しかも藪やぶの下で、老猫おいねこの善良なのかもしれ化けたら、このほかになりようはなさそうな、べろんと剥むけて、くちやくちやと目の赤い、髻ひげをそのままの頬しわの皺で、古手拭かぶを被かぶつた、影法師のような、穴の嫗ばあさんとかいう店で、もう霜枯しもがれだから花野は幻になった、水より日向ひなたがたよりらしい、軒つるに釣した坊さん華ばなに、葉の枯れがれの小菊を交せて、ほとけ様は五人と、八郎が云つて、五把は、線香を買添えた時「あんやと、あんやと。」と唱名のごとく呟つぶやいて、景物らしく硫黄いおうの附木を束から剥はいでくれたのには、私は髻髯ほうふつとして、生れぬさきの世を思つた。

寺の門には、樹立こたちのもみじに、ほかほか真赤まつかに日が射さしたが、墓所はかしよは湿しつて暗い。線香の煙けむりの、五いつすし条、むら生おえる枯尾花なびに靡なびく時、またぼつりぼつりと小雨が掛かると。——  
 当寺の老和尚が、香染こうぞめの法衣こころもをばさばさと音おとさして、紫の袈裟けさを畳たたんだままで、肱ひじに掛けた、その両手に、太杖ふとづえを屈こづきに、突張つっぱつて、馴なれて鳥の鳴く樹の枝下へ立つと、寺男うしろが、背後から番傘をさしかけた。

「大僧正の見識じやの、ははは。」

と咽喉のどを掠かすめて笑つて、

「はや、足腰もよう利かんで、さし掛傘も杖の中じや。意気地はないの、呂律ろれつもよう廻らん、大分に嘘をついたからの、ははは。」

中山派の大行者で、若い時は、名だたる美僧であつたと聞く。谷々の寺に飡こたまする、題目の太鼓、幾個か寺か。皆この老和尚の門弟子もんていしだそうである。

「よう御参詣じや——紅屋の御新姐ごしんぞう……今ほどはまた廚裡くりへお心づけ過分にござる。ああ、そのお袴の御仁ごにん（八郎を云う）、前にある黒い瓶かめじやがの。それは東海道横浜にござつた、葛原くずはら（八郎の母方の姓）の妹娘の骨こつを入れて、——仲仙道上田にござる姉娘がの、去年供養に見えた一具じやが、寺で葬るのに墓を穿ほつた時よ。私わしが立合あうて、思うには、祖父おおじ

祖母、親子姉妹、海山百里二百里と、ちりちりばらばらになったのが、一つ土に溶け合うのに、瀬戸ものの欠が交つては、さぞ疼かろう。飯に砂利を嚙んだようにあろう、と思うたじやでの、棄てるも勿体なし……誰方ぞ参詣の折には、手向の花を挿れても可いと思うて、石塔の前に据置きましたじや。さ、さ、回向をなされ。いずれも久しい馴染じやな。」と、ほろりとした。聞くものの袖も時雨れつつ。……

「——横浜の、ええ、叔母の娘、姉妹でね、……叔母の娘は可笑しいんですが、叔父は私なんぞ顔も覚えないうちに、今の墓に眠ってるんです。妹の方は——来る時、傍を通りました、あの遊廓で芸妓をしていて、この土地で落籍されて、かなりの商人の女房になったのでしたつけ。何か商売上もくろみがあつて、地方を了つて、横浜へ出て失敗をしましてね。亭主も亡くなつて、自分で芸事を教えていました。茶だの、活花だの、それより、小鼓を打つてね、この方が流行つたそうです。四五年前に、神田の私の内へ訪ねて来た時、小鼓まで持参して、（八郎さん一調を。）と云うじやありませんか。しかも許しもの註文です。（何、私と一調だ、可かろう。さあ素裸になりたまえ、一丁組もう、）と云つたもんだから。——勿論、年増だが、別嬪だから取組んでも可い了。簡かも知れ

ません……従妹め、怒ったの怒らないの、それぎり出て来ない。……音信不通同様で——去年急病で亡くなりました。がその節は、私は大阪へ行っていました。

ああ、信州の姉の方ですか。——これも芸妓げいしやで方々を流転して、上田くるわの廓で、長唄か何か師匠をしている、この方は無事で、妹の骨を拾ったんです。

横浜しんぼとけの新しんぼとけ 仏ひとだまが燐火にもならず、飛んで来ている——成程、親たちの墓へ入ったんだから、不思議はありませんが、あの、青苔あおごけが蒸して、土の黒い、小さな先祖代々の石塔の影に、真新しい白い塔婆で、すつくりと立ってたのにはちよつと面食めんくらいました。

——（八郎さん相撲……）と、今にも言いやしないか、と思つて、ぶるぶるツとしましたよ。あれと取組むのは当分恐れます。」

——寺の帰途かえりに、八郎が私とお悦にかく話した。——

雪女郎の柳を、欄干から見る、その袖もかかりそうな、大川べりの料亭一柳で、昼飯ひるを済ました。

で、川通りを歩行あるきながら、ふと八郎の覗のぞきこ込んだのが、前に言った、骨董屋の飾窓だったのである。

その花瓶<sup>はながめ</sup>だが、私は陶器など一向で……質も焼も、彩色も分らない。総地の濃い藍<sup>あい</sup>に、桔梗<sup>きぎよう</sup>、女郎花<sup>おみなえし</sup>、薄<sup>すすき</sup>は言うまでもなく、一面に秋草を描いた。その葉の透間、花の影に、墨絵の影法師で、ちらちら秋の虫のようなのを、熟<sup>じつ</sup>と視<sup>み</sup>ると、種々<sup>いろいろ</sup>な露店の黒絵具である。また妙に、食<sup>たべ</sup>ものばかり。土地がらで、鮓屋<sup>すしや</sup>、おでんはない。飴<sup>あめ</sup>の湯、かんとう焼、白玉焼、葛<sup>くずまんじゅう</sup>饅頭<sup>あわ</sup>、栗<sup>どじょう</sup>の餅。……鮓<sup>うりな</sup>を串にしたのだそうだが、蒲<sup>かばやき</sup>焼など、ひとつずつ、ただその小さな看板にだけ、売名呼名<sup>うりな</sup>をかいて、ほんのりと赤で灯が入っていて、その灯に、草の白露が、ほろほろと浮く。……

「姉さん、これは夏場、この川<sup>かわどおり</sup>通へ出る夜店そっくりだね。」

八郎<sup>うち</sup>の家は、すぐこの近所だったそうである。

「たった一度だったが、姉さんと一所<sup>ある</sup>に歩行いた——」

「ほんとうね、……夢のようだけれど、植木屋の花の中から見た所かしら、そして月夜のようにだよ。」

真中<sup>まんなか</sup>に手がついて、見ると、四角な釣瓶<sup>つるべ</sup>に似て、しかも影燈籠の意匠らしい。

「ちよつと欲<sup>ほし</sup>いなあ。」

「欲<sup>ほし</sup>いの？」

「うむ。」

「欲しいものはお買いなさいよ。」

「値がどうも。」

「聞いてみましょうか。……私もちつと持つている。」

「串 戯 じょうだん じゃあない。まだ給金も受取らないし、手が出せないと極 きま りが悪いや。」

「八さんは、それだから可厭 いや さ、聞くだけ聞くのに、何構うもんですかね。」

八郎はその時十歩 とあし ばかり遁 に げるようにしたのに、お悦はずんずん入った。少し手間取ったが、胸を反らして出て来た。

莞爾 にっこり している。

「どうでした。」

「幾 いく 千らだと思う。——お思いなすつて、榎村先生。」

「さあ。」

「分らない。」

「五百円。」

「ええ。」

「……モ、七百円もするんですが、うしろにちよつと疵きずがあります、緋目高一疋びきほど。ほほ、ですから、ただそれだけで——百円という処を……だわね、……もつとも諸だい侯みよう道具ですつて、それをお負け申して……九十円。」

「買おう。」——

言つた通り、荷造りを頼むなり、受取るなり——楽屋へは持つて行けないから——もう一度来るとして、それから三人で舞台むかに向つた。

楽園がくえんと云うのだそうである。諸だい侯みようの別業しもやしきで、一器ひとつ、六方石の、その光沢水晶ひかり

にして、天然に簫しょうの形をしたのがある。石燈籠ほどの台に据えて見事である。そのほか簞ちりき策などは、いずれあとから擬えたものであろうが、築山、池をかけて皆揃なぞらつてゐる。が、いまその景色を言う場合でない。

表入口を、松原越ごしの南の町並に受けて、小高く、ここに能楽堂がある。八郎は稚おさない時、よく出入をして知つてゐるので、その六方石を私に教えようとして、弾はじかれたように指を引いた。直ぐそれから、池の石橋を一つ、楽屋口へ行くと、映山紅つつじ、桜の根に、立つたり踞しゃがんだり、六七人むくむくと皆動いて出た。真中まんなかに、尖とがつた銀杏返いちようがえしで胸を突出しながら、額越ひたいごしに熟じつとこちらを視みたのは、昨日きのうのお久という人で、その両傍りようわきから躍り

出した二人の少年が、「久の息子です、伯父さん。」「伯父さん僕です。」「橘さん、久の娘の婿ですよ。」と続いて云つたのは、色の白い、にやけた男で、しよたりと裾長に、汚い板草履は可いが、青い友染の襦袢じゆばんの袖口をぶらりと出している——弱つた——これが蒔絵師まきえしで。……従つて少年たちは、建具屋と鉄葉屋ブリキヤの弟子だから印半纏しるしばんでんはらがけ腹掛まつくろでもいるか、と思うと、兀はげちよろけた学生服、徽章きしょうなし無の制帽で。丸顔で色の真黒な、目のきよりりとしたのが、一人はベエスポオルの小手を嵌はめた手を振るし、就なかんずく中一人口イド縁ぶちの大目金を掛けたのが、チュウイングムをニチャニチャと噛かみながら、「久の息子です。伯父さん。」「伯父さん僕です。」「ごほん、……はじめまして、はい、久の主人でやして。」大古おおふるの黒の中山高帽ちゅうを脱いで、胡麻塩ごましおのちよぼりとした髯ひげを抜きながら、挨拶したのは、べんべらものの被布ひふを着て、煤すすくすぶりの総ふさの長い中位な瓢箪ひょうたん筆ひょうたんを提こげている。「御先生様。」「はい、大先生様。」と割込んだ媽々衆かかあしゅが二人、二人とも小児こどもを肌おんぶをした処は殊勝だが、その一人は、負おぶつた他ほかに、両手に小児の手を引いていた。「あんさん、縁者の人——こちらは養家さきの兄の家内たちや——見物をさしてたあせ。……ほんに、あんさんのお底かで……今日という今日は、私は肩身が広いぞね。」

特に、婦人にかけては、恐らく世の仁者だ、と称とえられる私とでさえ、これには辟易へきえきし

たのである。

ふとお悦を見ると、額の疵きずあとが颯さつと薄化粧を切つて、その色はやや蒼あおざめた。愕がく然ぜん、茫然ぼうぜん、唾然あぜんとして立竦たちすくんだ八郎がたちまち恭うやうやしくお辞儀をして、

「誰方どなたも御見物は木戸口から願います。」

と言つた。

「分りました。——兄さん、私にまかせてね、分りましたよ。あなたは黙っている事……可よござんすか。さあさあ誰方もいらつしやい。——御案内……ッてらッしやいッ。」

と冴さえた声で手招きをしながら、もう石橋を翻ひらり然と越えて、先へ立つて駆出すと、柔順すなおな事は、一同ぞろぞろ、ばたすたと続いて行く。

八郎は吻ほっと息して、

「何とも、彼とも、ものに譬たとえようがありますまい。——無理解とも無面目とも。……あれで皆木戸銭の御厄介です。またあの養母というのがね、唾つばを刎はねてその饒舌しゃべる事饒舌る事。追従ついしょう笑わらいの大口を開くと齒茎が鼻の上まで開はたけて、鉄漿おはぐろの元はげた乱杭らんぐい齒の間から咽喉のどが見える。怯おびえたもんですぜ。私が九ツ十ウくらいの時まで、其奴そいつが伯父伯母の姪めいの嫁入さきの忤せがれの孫の分家の新屋だというのを、ぞろぞろと引率して、しなくも可

い、別院へ信心参りに在<sup>ざい</sup>方<sup>かた</sup>から出掛けて来て、その同勢で、久の実家だと泊<sup>とま</sup>り込むんです。草鞋<sup>わらじ</sup>を脱いだばかりで、草臥<sup>くたび</sup>れて框<sup>かまち</sup>から膝行<sup>いざりこ</sup>込むのがある、他所<sup>よそ</sup>の嬰兒<sup>あかご</sup>だの、貰<sup>もら</sup>われた先方<sup>さき</sup>のきようだい小児<sup>がき</sup>が尿<sup>し</sup>を垂れ散らかすのに、……負うと抱くのが面倒だから、久を連れて来ない事があります。養父<sup>ちちおや</sup>の方が可愛がつて片時も離さないところいう言種<sup>いぐさ</sup>でね、……父も祖母も、あれに中<sup>あた</sup>られると思うから、相当に待遇するでしょう。いい事にして、同勢がのめずり込む、臭いの汚いの、煩<sup>うるさ</sup>いのつて——近頃まで私は、煩<sup>わづ</sup>って寝る時という、その夢を見たんです。」

いや、何とも申しようのない処を、木戸口をまわりに、半身で、向うからお悦が、松を小楯<sup>こだて</sup>においでおいでを合図した。

勿論、八郎を呼ぶのではない。

「おいでなさい。——御退屈でしょうが、お席が出来たようです。あの人の事だから、今の連中と一所には決してしません。」

「そんな事なぞ。……私は楽<sup>たのし</sup>みにしている。今日の天人の手は白いでしよう。」

不意を打たれたように、この名誉の能職は、ふと黙った。外套から、やがて両手を、片手でその手首を、さもいたわりそうに取つて、据えると、扇子持つ手の甲<sup>じゅう</sup>を熟<sup>じゅう</sup>と重たげに

観て、俯向いて言った。

「未熟ながら、天人が雲に背伸びはしますまいが、この手首は白いどころか——六つ指に見えなければ可いと思うんです——」

と、もの寂しそうに首垂れた。

「いずれ後程。」

楽屋口の板廊下には、松の蔭に、松の蔭に、羽織、袴が、おお、麻上下も立交る。舞台では間あい狂言きやうげんの高声が、見物の笑いととも板に響いた。

## 八

私は、ここに橘八郎の舞台については徒に記事いたずらを費すまい。草の花に露店の絵の花瓶はながめを写した、陶器に対すると同じ知識の程度では、専門の能職に対して気の毒だと思う。

ただ、幸い、……いや推量のごとく、お久という人たちは席が離れていた。もつともほとんど満員である。お悦と取ったのも、四人席を他と半ば分けて、歩板あゆみいたに附着いた出入に近い処であつた。

橋がかりに近い、二の松の蔭あたりに、雪代の見えたのが、単ひとえに天降あまくだる天人を待つ間の人間の花かと思う。

——のうその衣きぬは此方こなたのにて候、何しに召され候ぞ——

幕は揚あがつた。揚幕あげまくの霞を出いづる、玉に綾あやなす姿とともに、天人が見はるかす、松にかつた舞台の羽衣にしぎの錦には、脈打つ血が通つて、おお空の富士の雪に照榮てりはえた。

八郎のその化け方も不思議だが、氣をつけて見ると、成程、もうその時からして専念に舞台を見ているものは数うるほどしかない。もっとも謡本を手にしらないものも、稀まれである。

——涙の露の玉かづら、かざしの花もしおしおと——

という頃は、低声こゑであとをつけるのが、ぶつぶつぶつ、ぼうぼうと鳴いて、羽の生えたものは、蚊かも、蜂はちも、天人であるかのごとくに聞こえた。

——迦陵嚩伽かりようびんがの馴なれ馴れし、声今更に僅わずかなる、雁かりがねの帰り行く。天路あまじを聞けばなつかしや、千鳥かもめの沖つ波、行くか帰るか、春風の——

そのあたりからは、見物の声が章句も聞こえて、中には目金の上へ謡本を突上げるのがあり、身動きして膝たを敲くたたのがある。ああ、しかも聞け——お久という人の息子が一人、あとをつけて謡つたのを。

——シテ「いや疑は人間にあり、天に偽りなきものを——

気のせい、か、チョツと舌打をしたように思つたが、それは僻耳であつたらう、やつと静々と、羽衣を着澄して、立直つたのを視て、昨夜紅屋の霜に跪いて、羽織を着せられた形に較べて、ひそかに芸道の品と芸人の威を想つた……時である。お久という人が、席でヌツと立つて、尖つた銀杏返で胸を突出して正面に向合つた、途端であつた。立籠む霧が艶なる小紋を描いたような影が、私の袖から歩板へ衝と立つて、立つと思うと、つかつかと舞台へ上つた。その、そのお悦の姿が、くつきりとやや小さく見えた時と、重り合つて、羽衣の袖が扇子とともに床に落ちて、天人のハタと折敷く、その背を、お悦が三つ四つ平手で打つた……と私は見たが。……

「急病だ。」

「早打肩（脳貧血）だ。」

「恋の怨みだ。」

「薄情の報だ。」

と急遽囁き合う声があちこちして、天井まで湧返る筈を、かえつて、瞬間、寂然とする。

もうその時、天人は、転んだ踊子が、お母<sup>つか</sup>さんに抱かれるように、お悦に背を支えられて、しかし静<sup>しずか</sup>に、橋がかりを引いて行く。……一の松、二の松、三の松に、天人の幻が刻まれて、その影が板羽目に錦を映しつつ、藻抜けて消えたようなシテの手に、も一度肩を敲<sup>たた</sup>いて、お悦が拾<sup>ひろ</sup>つて来た扇を渡したのが幕際であつた。

幕は消して取つた。

同時に、少し横なぐれになるまで、身に振<sup>ふり</sup>を加<sup>く</sup>れて、今度は、友染の褌<sup>つま</sup>を蹴<sup>け</sup>て、白足袋で飛ぶように取つて返すと、お悦が、私の手を取るが迅<sup>はや</sup>いか、引出すのに、真暗<sup>まっくら</sup>になつて、木戸口へついて出た。その早い事、私が第一に目についたのは、青いような駒下駄の鼻緒で、お悦はもう自分のを、自分で抜いて取つて、私の下駄をポンと並べた。

それよりして松林のたらたら下<sup>お</sup>りを一散に駆出した。

「御免なさい、先生。——八郎さんに逢うまでは何にも聞かずに下さいましよ。」

「?……他国ものです、方角が分りませんから、何事も貴女<sup>あなた</sup>次第です。」

町もこの辺は場末らしい。松を透<sup>す</sup>いて、小高く能楽堂の電燈が映<sup>さ</sup>すから、あのまま、潰<sup>つぶ</sup>れたのでも崩れたのでもない。が、雷か、地震か、爆発の前<sup>ぜん</sup>一秒を封じた魔の殿堂の趣しで、楽園の石も且つ霜柱のごとく梯<sup>おもかげ</sup>に立つのを後<sup>あと</sup>に、しばらくして、賑<sup>にぎやか</sup>な通へ出た。

「少しここに隠れていましょう。」

落人の体である。その饅飩屋へ入った時は、さすがにお悦が「お水を、お水を。」と云った。そうして、立続けに煽つて、はじめて酔つたように、……ぼつと血の色が顔に上つたのである。

「何にも言わないかわり、私は飲みますよ。」

「沢山めしあがれ、……あとで、また御馳走を。」

——電話で、旅宿を——それから呼出したが紅屋へ掛けた。八郎は勿論帰っていない。楽屋に居る筈はなからう。居てもそこを訪ねる数ではないから。……再びお悦の導くままに。——

かくて、川通りの骨董屋へ来たのである。

果して八郎はここへ頭われたのであつた。

微妙な靈感と云つてもいい。……ここへ見当を着けたお悦が、まだ驚いた事には、——

紅屋で振舞つた昨夜の酒を、八郎が地酒だ、と冷評したのを口惜がつて、——地酒のしかも「剣」と銘のある芳醇なのを、途中で買つて、それを角樽で下げていたのである

から。

掛けたか、掛けないように、お悦は、骨董店の椅子に腰を摺<sup>ず</sup>らして、  
「そんな服装<sup>なり</sup>で、花瓶を持つて、一体どっちの方へ行つたでしょうね。」

「ええ、大橋の方へ、するするとな。はあ……」

お悦が莞爾<sup>にっこり</sup>して、

「この人通りじや身投<sup>みなげ</sup>でもありませんね。」

亭主の顔を見よ。その驚いたのへ引被<sup>ひきよ</sup>せて、

「湯吞<sup>ゆのみ</sup>を一つ貸して下さい、お茶碗でも。」

「はあはあ。」

芬々<sup>ぶんぶん</sup>薫る処を、波々と、樽から酌<sup>つ</sup>いでくれたから、私はごくごくと傾けた。実に美<sup>うま</sup>酒<sup>け</sup>の鋭さは、剣である。

「お楽<sup>たのし</sup>みでございますな、貴女様もお一ついかがで。えへへへ。」

と、自棄<sup>やけ</sup>に、口惜<sup>くや</sup>しそうに、もう一つ出した茶碗へ、また充満<sup>いっぱい</sup>に樽の口をつけた。

「お酒だけは一滴も不可<sup>いけ</sup>ません。——旦那めしあがれ。……御馳走様。ほほほほほ。」

## 九

橋手前、辻の角の、古ぼけたが、店並一番の老舗らしい菓子屋へ入って、売台へ立ちながら、

「ちよつと……ああ、番頭さん、お店の方もお聞きなさい。私ね、この頃人に聞いたんですがね。お店の仕来りで、あの饅頭だの、羊羹だの、餅菓子だのを組合せて、婚礼や、お産の祝儀事に注文さきへお配りなさいます。」

「へい、へい。」

「あの、能の葛桶のような形で、青貝じらしの蒔絵で、三巴の定紋附の古い組重が沢山ありますね。私たちが豆腐や剥身を買うように、なんでもなく使っていていらつしやるようだけれど、塗といい、蒔絵といい、形といい、大した美術品とやらなんですとさ。」

「へーい、成程。」

「仏蘭西のパリイの何とかって貴族の邸の応接室で、ヴァイオリンですか、楽器をのせ

る台になつてゐるんですつて。」

「へーい、成程。」

「提灯ちようちんを一つ貸して下さいな。」

「へーい、成程。」

「その道具屋さんで借りれば可よかつたのに、ついうっかりしたもんだから。」

「へへい、成程。——どちら様で。」

「別院傍わきの紅屋の家内うちですがね、どちらだつて構くわないじゃありませんか。」

お悦は澄まして、その定紋じやうもんつきの提灯ていとうを下さげて前まへへ立つと、一柳亭の傍わきを、川へ、石段

づたいに、ぐいと下りた。大橋の橋はし杭くわいが昼見た山の塔の高さほどに下から仰あがられる、橋はし

袂したもとの窪地くぼちで、柳の名、雪女郎の根の処である。

「ここが暗いんですからね。——ちよつと見たい事があるんです。」

片側川端の窓の燈あかりは、お悦の鼈べつこう甲なかざしの中なか指さしをちらりと映しては、円まるまげ鬚げを飛越して、

川水に冷い不知火しらぬいを散らす。が、屈かがんで、差出した提灯の灯で見ると、ああ、その柳の根

に、叩きつけたようになって、秋草の花はな瓶がめががらがらと壊れていた。石に化した羽衣を、

打砕いたようである。その断片の処ところどころ々、女郎花おみなえしを、桔梗ききようを、萩ながれさつを、流ながれが颯さつと、脈

を打つて、蒼白い。

「御覧なさい。こんなことだろうと思つたんです。小児の時、あの人は、この美しい柳に魅入られたんですか、何ですかね、ふらふらとして、幾たびもここで死のうとしたんですから——いいえ……」

と優しい声して、

「大丈夫、かえつて身がわりになつたでしようよ。この花瓶がですよ。でも、あの人の無事のお祈りのために、放生会をして行きましょう。昨日は大きな鮎を料理しましたから」

持てとも言わず、角樽を柳の枝に預けると、小褌をぐい、と取つた緊つた足の白いこと。——姿も婀娜に、流へ張出しの板を踏むと、大川の水に箱造りの生簀がある。

「や、それを放すんですか。」

「ええ、一柳亭ですがね、する事は先へして、あとで掛け合つた方が捗取りますから。」  
伸上つて、覗いたが、綱で結えたまま、錠を下してない。

踞んで、提灯を翳したと思うと、

「あ、可厭な。」

と云った。

「大な鰻<sup>おおき</sup>が居ますか、居ますか、鯰<sup>なます</sup>。」

「お退<sup>ど</sup>き、お退<sup>ど</sup>き——」

と生簀<sup>いけす</sup>を見詰め、頭<sup>かぶり</sup>を掉<sup>ふ</sup>つて、

「いいえ、私が何かしようとする、時々目の前へ出て来るんです。……袴<sup>かみしも</sup>を着た、頭の大きな、おかしな侏<sup>いつすんぽうし</sup>儒<sup>じゆ</sup>ですがね。」

私は思わず後<sup>あと</sup>へ退<sup>さが</sup>つた。葉は落ちつつも、柳の茂りで、滝に巻込まれる心持<sup>こころもち</sup>がした。気の迷<sup>まよ</sup>いと思つたが、実はお悦<sup>えつ</sup>が八郎<sup>ひつ</sup>を引<sup>ひ</sup>ぱたいた瞬間<sup>しゅんかん</sup>にも、舞台の端をちよこちよこと古い福助<sup>ふくすけ</sup>が駈<sup>か</sup>けて通つた。

「可厭<sup>でこすけ</sup>だつたら。何だい出額<sup>でこすけ</sup>助。」

声とともに、颯<sup>さつ</sup>ともつれた鬢<sup>びん</sup>を払<sup>は</sup>つて、横に提灯<sup>ていとう</sup>の柄<sup>えい</sup>を口に啣<sup>くわ</sup>えると、まくり手に二つ三つ生簀<sup>ゆす</sup>を揺<sup>ゆ</sup>つて、どぶんと水に浸した。鯉<sup>こい</sup>の刎<sup>は</sup>ねる隙<sup>ひま</sup>もない。魔<sup>ま</sup>のごとき大きな黒い橋杭<sup>きやうか</sup>が、揃<sup>そろ</sup>つて、並<sup>なら</sup>んで、どぶんどぶん、どぶんと飴<sup>お</sup>を返<sup>かへ</sup>した。

「さあ、参<sup>まゐ</sup>りましょう、お待遠<sup>まち</sup>様。八<sup>やち</sup>さんの居<sup>い</sup>所<sup>ところ</sup>は、大抵<sup>たいてい</sup>もう知<sup>し</sup>れました。」……

## 十

「……居る、居る、居ますよ。」

提灯をフツと消す。……蠟燭の香を吸って消える、紅い唇を、そのままに、私の耳に囁いた。

八郎の菩提寺の潜門を入った、釣鐘堂の横手を、墓所へ入る破木戸で、生垣の前である。

「ほら、扉も少し開いていますわ。——先生ね、あなたね、少し離れた処で、密と様子を  
見ていて下さい。……後生ですから。」

「お指図通り。」

私もここは声を密めよう。

「兄さん、兄さん——」

「うーむ。」

「あんまりつい通りな返事なことね、うーむなんて。」

「うむ、だつて。」

「もうちつと驚かなくつちやあ。……いきなり、お能の舞台から墓所じやアありませんか。そこへ私が暗くらやみ中に出たんだもの。」

「何だか来そうな気がしていた処だからね。」

「ええ、私もここに兄さんが居そうな気がしたんですよ。兄さん、御堪忍ね。あれ、煙草たばこを喫のんでるんですね。」

「墓を手探りで、こう冷い青苔あおこけを搜したらね、燐寸マッチがあつたよ。——今朝忘れたものらしい。それに附木まであるんだ。ああ、何より、先生はどうした、槇村さんは。」

私は約束で息を呑んだ。

「先生はね、とにかく、雪代がおともをして、おもてなしをしています。」  
嘘を吐つけ。——

「どこで。」

「一柳亭で。」

「また一柳かい。いや、それにしても可羨うらやましいな。魂を入かえたいくらいなもんだ。——もつとも、魂はどこへ飛んだか、当分解わからないから、第一その在処ありかを探してかからなけ

りやならないけれどね。」

「だから、お墓所へ来ているじやありませんか。」

「まあ、そんなものか。——ああ、それにしても羨うらやましい。」

「串じょうだん戲はよして、ほんとうに兄さん、堪忍してね。」

「何をさ。」

「だって、あんな処で、兄さんを打ぶったりなんか。」

「いや、その事なら、かえって礼をいう。……当然のことのようだ。何だか、妹の事なり、何なり、誰かに引ひっぱた撲かれそうな気がしてならなかったからね。——一体、女形の面めん裡うちからものが見えるツて事はないのに、駢むつゆび指が真向うへ立ったんだ。」

「さあ、その事です。よ。（余計な身寄は駢指むつゆびのようなものだ。血も肉も一つ身体からだになつて溶け合うのは、可愛い恋しい人ばかりだ。）ツて。……あら、煙草を喫くんでるから、ちらちら顔が見えて、いくら私でも極きまりが悪い。」

「何、構うもんか、全くそれに違いないんだ。」

「兄さん、きつとそう。」

「確かだ。」

「そんなら、なぜ、お久さんが真向うへ立つたって、なぜ、打たれそうな気がしたりなんかするんです。——それはきつと世間で、妹や、その親類の、有象無象に冷くっては人に済まない、と思うからでしょう。」

「世間なんかどうかでも可い。人間同志だからね。しかし舞台じや天人になつてゐるから。」

「天人なら、餓鬼……亡者を見ても、畜生……犬を見ても、皆な簪みかんざしの花の一つだと思わなければならぬかも知れませんね。そんなら、なぜ、人間そのままの時、楽屋口で、お久さんの娘の婿が、浅葱あさぎの袖口をびらつかせた時、その、たたき込んだ張はり扇おうぎとかで、人の大切な娘をただで水仕事をさせ、抱きまでして、姑しゅうとに苛めさせた上、トラホームが伝染うつるから実家さとへ歸した、横ぞつぽうを撲はりくじ挫くじかないんです。私は撲挫はりくじけば可いと思つた。撲挫くじいて欲しかったよ。兄さん、私はね、弱い優しいおとなしい兄さんしか知っていません。——十四で亭主を持たせられた時分だつて、ああ、兄さんがもう少し強かったら、乱暴だつたら、悪たれだつたら、と思わない事はなかつたんです。——

芸事で気が強くなつたんでしょね。——

昨夜ゆうべは別れてから十何年ぶりかだし、それだし、昨夜くらい、善知識とも、名僧とも、ありがたいお説教、神仏のおつげと言つては勿体ないかも知れません。夜叉やしや、悪魔の御託

でも構わない、あんな嬉しい話を聞いた事は生れてからはじめてです。だって、余計なものは肉親も駢指むつゆびでしよう、（血と肉と一つに溶けるのは、可愛い恋しい人ばかりだ。）というんでしよう……」

「私は信じるよ。」

「信じますね、……確かですね——そうすりや、私かつて、内の亭主は駢指です。」

私は舌を掉ふるった。

「お待ち、お待ち。——それは芸の上の話だよ。うぞう、むぞうに集たかめられると、能役者じやいられない、謡の師匠で、出稽古に信玄袋を持って廻らなけりやならないというんだよ。」

「舞台だけの役者だって、私は、兄さんの羽衣とかの天人の顔を見ているより、青めりんすを引ひっぱた撲たくか、駢指の講釈を聞く方がどんなに嬉しいか知れやしない。あすこで、あの羽衣の姿で、面で、雲から降りたそのままで、何千かの見物に、あの講釈をしたら、どんなにかいい心持だろうのに——だのに、青めりんすは引ひっぱた撲たかないし、じれったくって、自烈じれつたくって堪たまらない処へ、また余り姿すがた容かたちが天人になっておいでだから、これなり、ふツとどこかへ行つてしまいはしないだろうか、夢中で血迷って、留めようとして、ハ

ツと思うと、舞台の邪魔をした私だから、私まで、駢指だと兄さんが言いそうで、かつと口惜くもなるし、癩しかくにも障ったし、したもんだから、つい打ったりなんかして。」

「いや、もつともだ。芸に達して、天人になり澄ましていれば、羽衣さえ取返せば、人間なんぞにかかわりはないのだけれど、まだどうも未熟でね、雑念ましが交るから、正面を切つて伎わざの上でもきつぱりと行き切れないんだ。第一、はじめ、私は不意にお母さんつかが出て来たかと思つたよ。お久に対する処置ぶりが間違つてでもいるために。——ちようど棧敷のあの辺で、お母さんに抱かれて能を見た事を覚えているから。はつと思つてそれが姉さんと気がついた時は、私は、斬きられるかと思つた……すぱつと出刃庖丁でさ。……舞台へ倒れた時は、鮒ふになつたと思つたよ。鮒より金魚だ。赤地の錦で、鏡かがみ板いたの松を藻に泳ぐ……いや、もつと小さい。緋丁斑魚ひめだかだ。緋丁斑魚結構。——おお、肴さかなは出来た。姉さん、姉さん、いいものを持つているんだね。」

「どこでも構わず、息つぎに、逢つた処で、飲ませようと思つてさ。」

「頂こう——茶碗がない。」

「まさか、廚裏くりへも、ね。」

「飛んでもない、いまは落人だ。——ああ、好いものがある。別嬪べっぴんの従妹いとこの骨瓶こつがめです。」

かりに小鼓と名づけるか。この鳥胸で遣つけよう、不可いかな。」

「ああ、好きになさい。思つた事をしないでどうするもんですか、毒になつたつて留めやしない。」

「その勢で——と爛はどうだろう、落葉を集めて。」

「すぐに間に合いますよ。」

「さきへ、一口遣つてと。……ふツ、さて、こう度胸の据つた処で、一分別遣つつけよう。私のこんな了簡じや、舞台に立てば引撲かれるし、謡の出稽古はしたくなし、……実は、みつしり考えようと思つてね、この墓所へ逃込んだんだが。」

「よく、楽屋で騒ぎませんでしたね。」

「騒ぐ間がありやしない。また騒いだ処で、玄人の連中は、いずれ東京へ出れば世話になろうと思うから、そつとして置いたのさ。そこは流儀の御威光です。」

「何がまた口惜くて、あの花瓶を打欠いたんです。」

「もう見て来たのか、迅いなあ、天眼通だ。……あれはね、何、買う時から打壊すつもりだったんだよ。あの絵に、秋草の中に、食ものばかりの露店の並んだのを見て、ふらふらとなつた。——川通りの夏の夜店へ遊びに出ては、一軒々々指を啣えて欲しい欲しいと

餓鬼みたいさ。買えないだろう。あの粟餅あわもちのふかし立たてだの、白玉焼の餡子あんこのはみ出した処ところなんぞ、今思出しても、唾つばが垂れる。小僧、立つな立つな見ていて腹は満くちくならない、と言われた事さえるんだから。

その腹癒はらいせと、自分のさもし根性を一所に敲たたき破つたのだよ、——一度姉さんと歩行あるいた時、何か買つて食べさしたいと思つたが、一銭あつた。……ざまあ見やがれ亡ほろびたがね、大橋のあの柳の傍そばに、その頃水菓子屋があつて、茹豌豆ゆでえんどうを売つていた。」

「覚えていますよ。」

「袋で持つと、プンと臭い。蒸臭むれてる、と言つたら、洗つて食えと言つた。癩しやくに障つて、打ちまけたら、お前さん、食べたより嬉しいと言つたぜ。」

「ええ、覚えていますよ。」

「場所が場所だし、念ばらしに一斉いっときに打ぶつけたんだよ。」

「その事です。何だつて思うままにするが可いいんです。」

「難ありがた有い、うむそこで、分別も爛かんもつきそうだが、墓の前で、これは火爛だ。徳利を灰つつこに突込むのさえ、三昧爛やきばがんというものを、骨瓶の酒は何だろう、まだちつとも通らないが、ああ、旨うまい。」

「少し強く焚くと、灰が立って入るもの。」

「おんな 婦だなあ、お悦さんも。この場合に、灰が飛込むなんぞどうするものか。しかしお志は頂戴する、おんな 婦は優しいな。」

おうぎ 扇子を開いて蓋をした。ふた 紺 青にきらきらと金が散る、こけ 苔に火影の舞扇、……極彩色の幻は、あの、花瓶よりも美しい。

内証の焚火は、骨瓶の下伏せに、左右へ這った、が、硫黄も燃したのであろう。青く潜つて、ちらちらと婦の褙をなぶり、赤く立って男の黒小袖の膝を弄んだ。

「ふーッ、いい酒だ。これで暮すも一生だ。車力は出来ず、屑は買えず、——姉さん、死し人焼の**びと**の口はあるまいか、死骸を焼く。」

「ありますよ。」

「……………?」

「市営なんの**ぜいたく**って贅沢なのは間に合わないけれどね、村へ行くと谷内谷内という処の尼寺の尼さんが懇意ですね。その谷戸の野三昧なら今からでも。——小屋に爺さんが一人だから。兄さんが火箸を突込めば私が火吹竹を吹く。……二人で吹きおこしたって構わない。」

と透<sup>すか</sup>し見ると、鬢<sup>びん</sup>の毛が木の葉にこぼれて、頬<sup>こ</sup>を地<sup>じ</sup>ずりに、瓶<sup>かめ</sup>の下を吹いた。が、いつかくるりと裾<sup>すそ</sup>を端折<sup>はしよ</sup>った、長襦袢<sup>ながじゆばん</sup>は、土にこぼれて、火とともに乱れたのである。（註。二人して火を吹くは焼場なりという俗信あり。）

「ちつとも構<sup>や</sup>やしない、火葬場<sup>やきば</sup>ですもの。……寝酒ぐらいはいつでも飲ませる。」

「面白い。いや、真剣だ。——天人にはまだ修業が足りない。地獄、餓鬼、畜生、三途<sup>さんず</sup>が相当だ。早い処<sup>はくりよう</sup>が、舞台で、伯<sup>はく</sup> 竜<sup>りゆう</sup>の手から、羽衣を返された時、博覧会の饅頭の香<sup>におい</sup>気がした……地獄、餓鬼、畜生、お悦さん。」

「ええ、そうして、強くなつて、他<sup>ひと</sup>が羽衣を奪<sup>と</sup>ろうとしたら、めそめそ泣かないで、引<sup>ひ</sup>ばたかなくつちやあ……」

「二人は雌雄<sup>めすおす</sup>の鬼だが……可<sup>い</sup>いかい。」

「大好き。」

「家は？」  
うち

「駢指<sup>むつゆび</sup>を切るんです。」

「世間は？」

「青めりんすを打撲<sup>ぶっぱた</sup>くんです。」

「——姉さん、尼さんは懇意かね。」

「小屋の爺さんとも。」

「行こう。」

「行きましょう。」

「槇村の知らないうちに——何しろ、さしあたり行く処は、——どこにもない。」

「あれ。」

「え。」

「来た、来た、来た、また来た、また来た、うるさ煩い、煩いッてば、チヨツ福助。」

おんな婦が、はいから這<sub>は</sub>捌<sub>は</sub>まるか、しらはぎ白脛高く裾を払い、立って縫<sub>すが</sub>るか、はらはらと両袖を振った<sub>あおり</sub>煽<sub>あ</sub>に、かつらぱつと舞扇に火が移ると、まつくら真暗な裏山から、さつこ颯と木の葉おろしするとともに、火を<sub>は</sub>捌<sub>は</sub>めたまま、はばた羽搏いて扇が飛んだ。

「あれえ、火事。」

「飛べ、獅子。」

と言うとともに、てだれ手鍊は見え、おうぎ八郎の手は扇子を追って、六尺ばかり足が浮いたと思うと、宙で留めた。墓石台に高く立って、端然と胸を正したのである。扇子は炎をからめ

て、真中<sup>まんなか</sup>が金色<sup>こんじき</sup>の銀杏<sup>いちょう</sup>の葉のように小さく残った。

墓所<sup>やみ</sup>の暗夜——

「お悦さん……」

「……………」

「……火の羽衣を舞おう。もう一度舞台に立って、人間界に降りた天人を、地獄、餓鬼、畜生、三途まで奈落<sup>なれ</sup>へ墮<sup>だ</sup>して、……といって、自殺をするほどの覚悟も出来ない卑怯<sup>ひきよう</sup>ものだから、冥途<sup>めいど</sup>へ捷徑<sup>ちかみち</sup>の焼場人足、死人焼<sup>しびとやき</sup>になって、胆<sup>きも</sup>を鍛えよう。それから、その上で……」

——（愛鷹山<sup>あしたかやま</sup>や富士の高嶺<sup>たかね</sup>かすかになりて、天つ御空の霞に）——

羽衣が三保の浦に霰<sup>たなび</sup>くか、どうかを見るんだ、しかし、お悦さん、……」

「兄さん、口で云う事はほんとうに行<sup>や</sup>らなくつては可厭<sup>いや</sup>ですよ。」

「勿論——しかしお悦さん……酒はこぼれやしまいね。」

私というものは、——ここで恥を云うが——（崇拜をしているから、先生と言う。）紅葉先生の作新色懺悔の口絵に、墓参の婦人を、背後の墓に外套の肱について凭掛つて、熟と視ている人物がある。先生の肖顔だという風説があつて、男振がいかにもいい。

——男振は論じない。私のこの場合がちよつとその趣に似ていた。困つた了簡方の男で、そこでいい心地になつて、石塔に肱をついて、塔婆の陰から覗いたうちに、真暗になつたから、ハツと思うと、誰も居ない。——とろりとして夢を見たのであろうか。

寺の屋根も、この墓場も、ほとんどのものの黒白を分たない。が、門の方の峰の森から、釣鐘堂の屋根に、霧を込つて来たような落葉の褥を敷いた、青い光明は、半輪の月である。枯葎を手探りで、墓から迷つて出たように、なお夢心地で、潜門を——何となく気咎めがして——密と出ると、覚えた路はただ一筋、穴の婆さんのあたりに提灯が一つある。

——来る時、この裏の藪を潜つても、同じ墓所へ行く、とお悦が言つた。——ははあ擲手から出たかと思う、その提灯がほんのりと、半身の裾を映す……棲は彼の人よりも若く、しつとりと、霧に蔦もみじした紅の、内端に細さよ。

雪代であつた。夢ではない。

「ああ、先生、母から自働電話で……（大急ぎでこつちへお迎いに。）……と云うものですから——すぐ自動車が間に合いましたの。」

母——そのお悦は、しかし、電話を掛け棄てにして、八郎とともに行くべき処へ去つたのである。

一柳亭の奥座敷で、雪代がしめやかに話した。

「……ほんとうにこまつた人ですの。申訳はありません。時々、魔が魅さしたようになりま  
すんです。でも、悪魔ばかりではないと見えましてね……今日なぞは、舞台で、母があの  
狂きちがい氣を行やらないと、小父さんは、壮士のような人たち大勢に打ぶたれる処だつたらしいん  
ですよ。——橋がかりの際きわの、私の居まわりにも、羽織袴きんぎょだの、洋服だの、合図をかわ  
していました。氣がついて、はつと思ひました時が、母のあの騒さわぎなんです。——歸りが  
けにね、大勢ぞろぞろと歩あるきます人中に、私も交まじつているとはお知んなさらないもので  
すから、……（へなちよこ伯父が何だい、あんな節のない謡なんか、ただ口を利いてるよ  
うだ。東京の謡は場違いだな、こつちから縁を切る。）と、お久さんの息子さんたちが言  
っていましたよ。お久さんは、しくしく泣いていなすつたようでしたけれども。……

八郎さんの奥さんに——いいえ、先生、それは大丈夫でしょうと思います……昔から、あの、店の、紅屋の福助の人形に邪魔をされますから。

電話でも、（あの張子を、密<sup>そつ</sup>とうしろ向きにするか、針で目を潰<sup>つぶ</sup>して出ておくれ、今度こそは、きつと頼んだよ。母さんの頼みだよ。）と言いました。けれども、私は決してそれはしませんでした。

ですから、谷内<sup>やちやち</sup>谷内——ええ、おなじ字を重ねますんです。谷内谷内の野<sup>の</sup>三<sup>さん</sup>昧<sup>まい</sup>で、兄さんと死骸を焼くんでしょう。それはほんとうで、そうして、それだけだろうと思います。

親類うちに、お産なぞありますとね、気が向くと、京都、岡山までも飛出して、二月三月帰らない事が度々ありました。お産の世話なんかするのも、死人焼をするのも、そんなに違いやしませんでしょう。……

死人を焼くのと、産の世話と、そんなに違いはしないと言う……この母にしてこの娘である。……雪の下を流るる血は、人知らぬ<sup>かがり</sup>篝<sup>かき</sup>に燃ゆる。たとえば白魚<sup>ひぎくら</sup>に緋<sup>ひ</sup>桜<sup>ざくら</sup>のこぼるるごとく。——

これは蒼<sup>かわ</sup>蠶<sup>はぎ</sup>魚<sup>ぎ</sup>を見て、海底の砂漠の影を想ったような空<sup>くう</sup>なものではない。

聞く処に従うと、紅屋の内儀の貞操は、かかつて、おでこの古福助の煤すすの頭にある。心細い道德だが、ないよりは可よからう。八郎に取つても、お久という人の一類と交渉を持たなくてはならないのなら、むしろ野三昧の人足の方が増ましかも知れない。いわんや、亡者を焼く烈々たる炎には、あの雪の膚はだが脂を煮ようものを。朱唇に煉炭を吹こうものを。——私にしても仮にこの雪代夫人と……

「でも、小父さんは気が弱いんですね、——あの、お久さんの頸えりの下が三寸ばかり、きれいで……似ているって、」

耳みみたば朶たをほんのり染めつつ、

「私のここへ——倒れて泣いたんです。涙がね、先生、随分泣いて、まだ、しつとりとしていますわ。情の迫った涙ですもの、着換えるのが惜おしいんです。」

私は危あぶなくその背せなに手を当てようとした。

翌日、朝、汽車で立つ時、雪代さんが、ひとり衣紋えもんを正して送った。

もう一人、中学の、くちやくちやの制帽と服で、鍵かぎ裂さきだらけで、素足に高足駄はを穿いた勇壮な少年がある。酒の席などでは閑却されたが雪代夫人の弟である。

「……先生、学校でも、教師も生徒も知ってるんですよ、先生の来た事を。僕、お話をききたかったんだけど、この姉なんぞが邪魔にしおって……」

「邪魔にはしませんよ。」

「何いつてやんでえ！ おかめ。」

「ああ、もう出ます——先生、くれぐれも八郎さんが言つてでした。……ほかにお見せ申すものはありませんが、是非、白山を見て下さいって。」

「先生、一番近いんじゃないやあ、布村つて駅を出て、約千五百メートルばかり行くと、はじめて真白な巔が見えますから。——いえ、谷内谷内は方角が違うんです。」

私は学生に手を伸べた。

「君、握手しよう——姉さんは、よその奥さんだから。」

「まあ、可厭ですこと……」

学生に講義する私の学問は、学校の名誉のために黙っておこう。

白山は、藍色の雲間に、雪身の竜に玉の翼を放つて翔けた。悪く触れんとするものには、その羽毛が一枚ずつ白銀の征矢になって飛ぼう。

が、その暗く雲に包まれた麓<sup>ふもと</sup>の底に、一ヶ所、野三昧の小屋があつて、二人が火を焚<sup>た</sup>いていそうでならない。

八郎はまだ帰京せぬ。

——細君は煩<sup>わづ</sup>っているのである。

昭和二（一九二七）年四月



## 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成<sup>8</sup>」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2011年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 卵塔場の天女

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>